

中・寺尾遺跡Ⅲ

大野城市文化財調査報告書

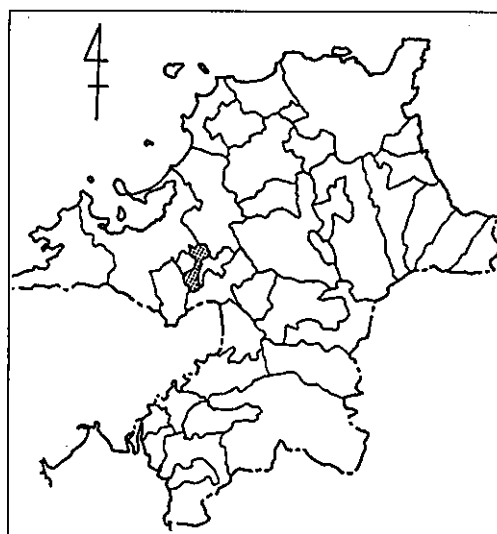
— 第 54 集 —

1999

大 野 城 市 教 育 委 員 会

中・寺尾遺跡Ⅲ

大野城市文化財調査報告書
— 第 54 集 —



1999

大野城市教育委員会



調査地全景

序

大野城市は福岡平野の一角にあり、埋蔵文化財に恵まれた街です。今回ご報告する中・寺尾遺跡は、市名の由来となっている国の特別史跡大野城跡がある四王寺山麓から伸びた小丘陵上にある遺跡です。弥生時代前期の小壺の副葬された墓地として知られています。遺跡の一部を都市公園として保存することになっていましたが、公園化に伴う工事によって遺構の一部が破壊される恐れがあったため、発掘調査を行うことになったものです。発掘調査は昭和58年度に行いましたが、種々の事情によりだいぶ年月を置いた報告になってしまいました。調査した場所そのまま埋め戻され現在公園として整備され、市民の憩いの場となっております。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、その成果がさまざまに活用されることになることを願っております。

最後に、発掘調査にご協力いただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成11年 3 月31日

大野城市教育委員会

教育長 堀 内 貞 夫

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が昭和58年度に実施した中・寺尾遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 中・寺尾遺跡は大野城市都市計画課が遺跡地を都市公園として整備することに伴って発掘調査を行ったものである。
3. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
4. 遺物実測は向直也・岸野和子・明永美和、製図は向と河鍋洋子・有田朱美が担当した。
5. 本書中で出土遺物量をビニール袋何袋と表現する時の袋の大きさは縦38cm、横26cmである。また、整理箱何箱と表現する時の箱の大きさは内法で40×61cm、深さ15cmである。
6. 本書の執筆・編集は舟山良一が担当した。
7. 本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。
8. 中・寺尾遺跡については1971年と1977年に『中・寺尾遺跡』という同名の報告書が刊行されており、それらをⅠ、Ⅱと考え、今回Ⅲとしたものである。

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 位置と環境.....	2
III. 既往の調査.....	5
IV. 調査の結果.....	9
1. 調査概要.....	9
2. 遺構と遺物.....	10
(1). 竪穴住居跡.....	10
(2). 掘立柱建物跡.....	23
(3). 土坑.....	24
(4). 甕棺墓.....	28
(5). 土坑墓.....	29
(6). 溝.....	30
(7). その他の遺構と遺物.....	31
V. まとめ.....	32

巻頭カラー図版

1. 調査地全景

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 発掘調査前全景（南から）
(2) 発掘調査前（北西から）
- 図版 2 (1) 調査地南東側（北西から）
(2) 調査地南東側（北から）
- 図版 3 (1) 1・2号住居跡
(2) 3号住居跡
- 図版 4 (1) 4・5号住居跡
(2) 5号住居跡
- 図版 5 (1) 6号住居跡
(2) 7号住居跡
- 図版 6 (1) 7号住居跡周溝
(2) 7号住居跡周辺
- 図版 7 (1) 8号住居跡
(2) 9号住居跡
- 図版 8 (1) 10・11号住居跡
(2) 12号住居跡
- 図版 9 (1) 13・15号住居跡
(2) 13号住居跡
- 図版10 (1) 15号住居跡
(2) 16号住居跡
- 図版11 (1) 17号住居跡
(2) 18号住居跡
- 図版12 (1) 19・20号住居跡
(2) 22号住居跡
- 図版13 (1) 1号掘立柱建物跡
(2) S K03
- 図版14 (1) S K04
(2) S K06
- 図版15 (1) K01
(2) K02
- 図版16 (1) 1号土坑墓
(2) 1号土坑墓遺物出土状態
- 図版17 (1) P 964

(2) 中・寺尾遺跡現況

図版18 出土遺物①

図版19 出土遺物②

挿 図 目 次

第1図. 周辺遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図. 中・寺尾遺跡位置図 (1/10000)	4
第3図. 既往の調査地点 (1/1500)	5
第4図. 第1次調査遺構配置図 (1/600)	6
第5図. 既往の調査で出土した副葬小壺、採集土器 (1/6)	7
第6図. 第2次調査出土甕棺実測図 (1/12)	8
第7図. 遺構配置図 (1/200)	(折り込み)
第8図. 1号・2号住居跡実測図 (1/60)	9
第9図. 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)	10
第10図. 1号住居跡出土石器実測図 (1/2)	10
第11図. 2号・3号住居跡出土土器実測図 (1/4)	10
第12図. 2号住居跡出土石器実測図 (1/2)	10
第13図. 3号住居跡実測図 (1/60)	11
第14図. 4号住居跡・SK04実測図 (1/60)	11
第15図. 5号住居跡実測図 (1/60)	12
第16図. 6号住居跡実測図 (1/60)	12
第17図. 7号・23号住居跡実測図 (1/60)	13
第18図. 7号住居跡遺物出土状態実測図 (1/20)	14
第19図. 7号住居跡出土土器実測図 (1/3)	15
第20図. 7号住居跡出土石器実測図 (1/2)	15
第21図. 8号住居跡実測図 (1/60)	16
第22図. 9号住居跡実測図 (1/60)	16
第23図. 9号住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第24図. 10号・11号住居跡実測図 (1/60)	17
第25図. 12号住居跡実測図 (1/60)	18
第26図. 13号住居跡実測図 (1/60)	18
第27図. 13号住居跡出土土器実測図 (1/4)	19
第28図. 15号住居跡実測図 (1/60)	19
第29図. 16号住居跡実測図 (1/60)	20

第30図. 17号住居跡実測図 (1/60)	20
第31図. 18号住居跡実測図 (1/60)	21
第32図. 18号住居跡出土土器実測図 (1/4)	21
第33図. 19号・20号住居跡実測図 (1/60)	22
第34図. 19号・20号住居跡出土土器実測図 (1/4)	22
第35図. 21号住居跡実測図 (1/60)	23
第36図. 22号住居跡実測図 (1/60)	24
第37図. 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	25
第38図. S K04遺物出土状態実測図 (1/20)	26
第39図. S K04出土土器実測図 (1/4)	26
第40図. S K04出土石器実測図 (1/2)	27
第41図. 土坑出土土器実測図 (1/4)	27
第42図. K01実測図 (1/10)	28
第43図. K01甕棺実測図 (1/4)	28
第44図. K02実測図 (1/10)	29
第45図. 1号土坑墓実測図 (1/10)	29
第46図. 1号土坑墓出土土器実測図 (1/3)	30
第47図. ピット出土土器実測図 (1/4)	30
第48図. ピット出土石器実測図 (1/2)	31

I. はじめに

中・寺尾遺跡はかつては大野城市大字中字寺尾に所在する遺跡として命名された遺跡である。その場所は、町名変更のため現在大池一丁目となり、遺跡名の由来がわからなくなってしまった。

かつて福岡県教育委員会によって3次の発掘調査がなされ、遺跡の立地する長細い丘陵の先端部と背後が開発され、一部が都市公園予定地として残存している状況であった。昭和58年度に当時の都市計画課から公園工事について着工してかまわないか問い合わせがあった。工事内容を聞くと予定の施設の中には結構掘削が深くなるものもあり、福岡県教育委員会とも協議を行った。その結果、公園工事に先立って発掘調査を実施した上で、遺跡の保存と活用を考えることとなった。発掘調査は昭和58年の6月から10月まで実施した。また、報告書作成のための整理作業は原稿執筆を除いては翌59年度に行ったが、予算その他の事情により報告書の完成が遅れ、今回刊行の運びとなった。

なお、現地は発掘調査終了後そのまま埋め戻され都市公園として整備されたが、当初の計画が変わり、自然を残した公園となり、遺跡を大きく壊すような工事は行われなかった。遺跡にとっては幸いであった。

調査体制については、現地調査（昭和58年度）から整理作業（昭和59年度、平成10年度）まで多年度を要しているため、多くの職員が関わった。調査時と整理作業時の体制は以下のとおりである。（昭和58年度）

大野城市教育委員会	教育長	二宮 親卯
	教育部長	後藤 幹生
	社会教育課長	船越 美直
	文化財担当係長	赤星 健彦
	文化担当主事	後藤 秀規
	技師	舟山 良一
	嘱託	横大路俊明
		秀嶋 和子

（平成10年度）

大野城市教育委員会	教育長	堀内 貞夫
	教育部長	高橋 正治
	社会教育課長	片岡 猛
	文化財担当係長	舟山 良一
	主任技師	向 直也
		徳本 洋一
		石木 秀啓
	技師	丸尾 博恵

囑託
整理補助員

明永 美和
武下 里織
境 聡子

現地での発掘調査は舟山と横大路が担当し、整理作業は主に向と秀嶋が行い、最終的に舟山が取りまとめた。

調査に際しては、当時の都市計画課職員の手をわずらわし、また福岡県教育委員会の技師諸氏からは多くの点でご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

II. 位置と環境

中・寺尾遺跡はかつては大野城市の大字中寺尾に所在したが、現在その場所は町名地番変更により、大野城市大池1丁目となっている。市名の由来ともなった大野城跡がある四王寺山と北に連なる乙金山からは西あるいは西北西に細長い低丘陵が幾筋も伸びる。それらは必ずしも基部から先端部まで徐々に高さを減ずるわけではなく、一端途切れたりしながら続くものもある。中・寺尾遺跡はそのような丘陵のうちの最も平野部に近い細長い丘陵に立地する。丘陵はおおよそ長さ400m、幅約50mの規模で、現水田面からの比高は5～6mを測る。おおむね東西方向に伸びる。基部に近い東側は早くに開発されたらしく、遺構の有無は不明であるが、西端の先端部から東へ約250mの範囲には遺構が残されていた。

中・寺尾遺跡は過去に3度発掘調査が行われ、古墳時代の遺構を少し含むが、主に弥生時代の遺跡であることが判明している。このため、弥生時代の遺跡を中心に周辺の遺跡の分布状況を見てみると、まず、蓮町池をはさんで北側に立地する森園遺跡がある。弥生時代の甕棺墓地や古墳時代の住居跡が検出されている。また、遺跡先端部から低地に下りた場所には、やはり甕棺と住居跡らしき遺構の検出されたヒケシマ遺跡がある。また、前期の甕棺と副葬小壺が見つかった御陵前ノ椽遺跡が当遺跡の北東約500mにあった。さらに当遺跡の北東約2kmには甕棺墓地として国の史跡に指定されている金隈遺跡が立地している。南側に目を転じれば、南東約500mに弥生時代の集落跡だったと思われる銀山遺跡があった。また南約500mには箱式石棺から内行花文鏡が出土した原門遺跡があった。

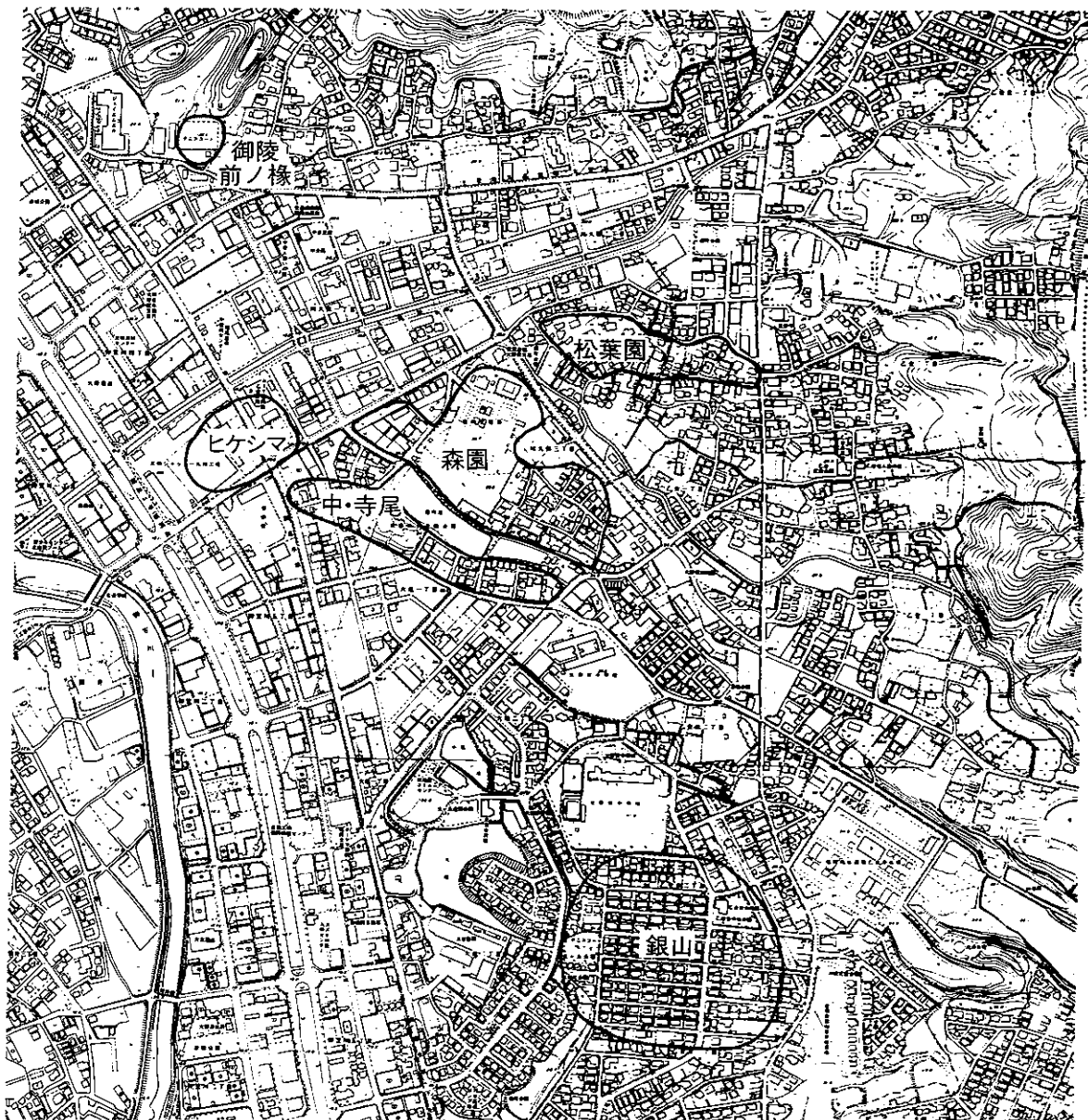
以上のことから、東側の山々から西に伸びる丘陵先端部には弥生時代の集落や墓地が立地していたことがわかる。そして、近年の調査成果から丘陵の基部には薬師の森遺跡のように奈良時代や鎌倉時代の遺跡が立地していることがわかってきた。さらに、山麓には50基以上の古墳から形成される乙金古墳群がある。

〈註1〉『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第三集 大野町教育委員会 1971
『中・寺尾遺跡』大野城市教育委員会 1977

- <註2> 『森園遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1988
- <註3> 『牛頸地区遺跡群Ⅰ』付編 大野城市教育委員会 1985
- <註4> 『御陵前ノ椽遺跡』大野城市教育委員会 1997
- <註5> 『福岡市金隈遺跡第一次調査概報』福岡市教育委員会 1970
『福岡市金隈遺跡第二次調査概報』福岡市教育委員会 1971
- <註6> 鈴木基親・渡辺正気「福岡県筑紫郡大野町原門所在箱式石棺群出土の内行花文鏡」『九州考古学』
第5・6号 1958
- <註7> 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ』福岡県教育委員会 1977



第1図. 周辺遺跡分布図 (1/25000)



第2図. 中・寺尾遺跡位置図 (1/10000)

〈凡例〉(第1図遺跡名)

- | | | | |
|----------------------|-----------|----------------------|---------------|
| 1 板付遺跡 | 2 金隈遺跡 | 3 仲島遺跡 (貨幣出土地) | 4 塚口遺跡 |
| 5 御陵前ノ榦遺跡 | 6 松葉園遺跡 | 7 森園遺跡 (I地点) | 8 森園遺跡 (II地点) |
| 9 ヒケシマ遺跡 | 10 中・寺尾遺跡 | 11 市原遺跡 | 12 村下遺跡 |
| 13 榎町遺跡 | 14 銀山遺跡 | 15 石勺遺跡 (弥生時代集落域の中心) | |
| 16 石勺遺跡 (弥生時代墳墓域の中心) | 17 瑞穂町遺跡 | 18 駿河遺跡 | |
| 19 原町遺跡 | 20 伯玄社遺跡 | 21 ナライ遺跡 | 22 西平塚遺跡 |
| 23 高辻遺跡 | | | |

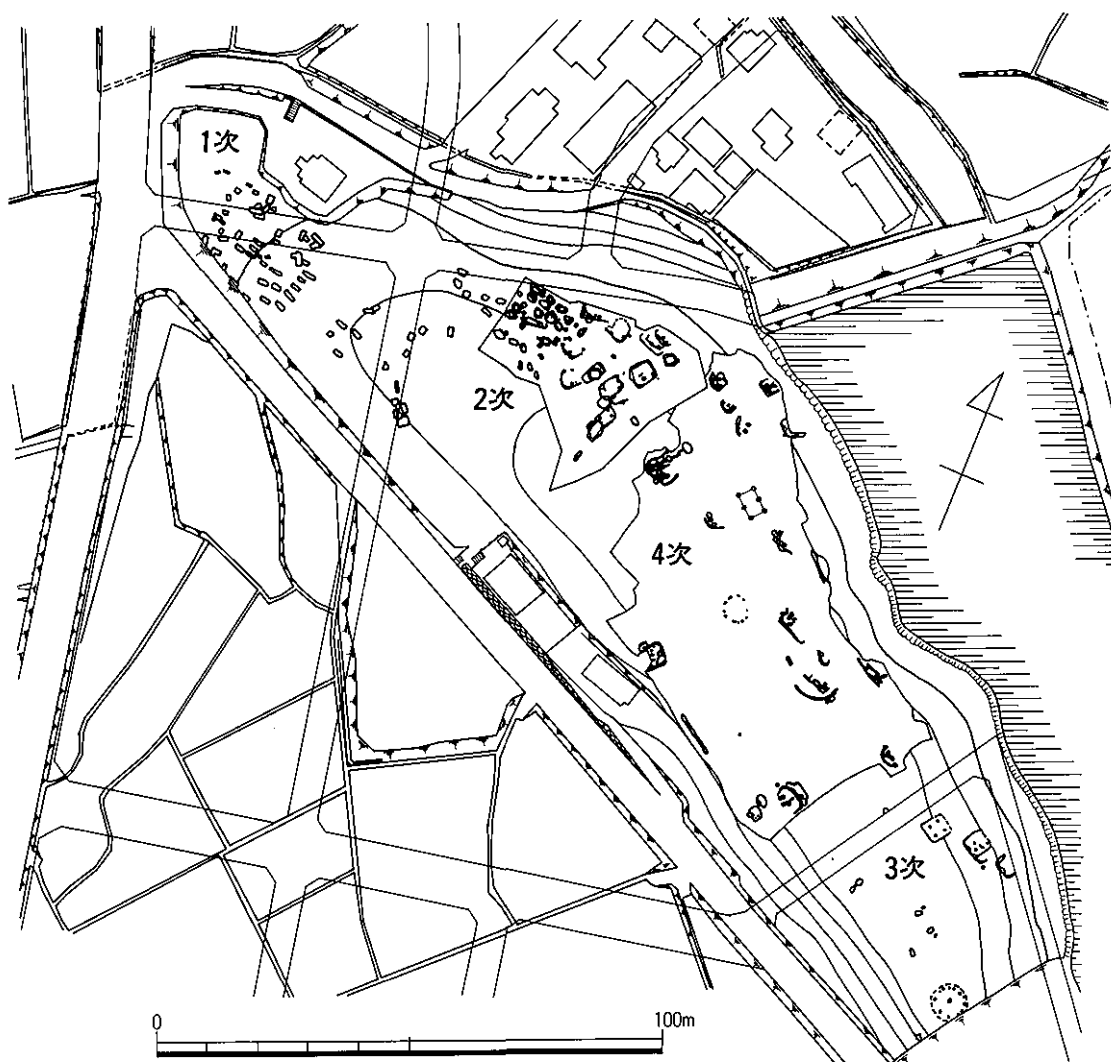
Ⅲ. 既往の調査

中・寺尾遺跡は福岡県教育委員会の手によって過去3回の発掘調査が行われている。既に報告書も刊行されているが、以下に調査成果の概略を述べたい。

1. 過去の調査結果

(1). 第1次調査(1969年6～7月)『中・寺尾遺跡』一大野町の文化財第三集一 大野町教育委員会 1971

調査地をⅠ区(東半)とⅡ区(西半)に分けて実施。Ⅰ区では土坑墓12基、甕棺墓21基、不整形ピット2基が検出された。Ⅱ区では54基の土坑墓、15基の不整形ピット、9基の甕棺墓が検出された。Ⅱ区の54基の土坑墓中8基から副葬小壺が出土した。板付Ⅰ式と考えられる。一方、Ⅰ区の甕棺墓中5基からやはり副葬小壺が出土した。これらは板付Ⅱ式に属す。以上から弥生時代前期の墓



第3図. 既往の調査地点 (1/1500)

制として土坑墓から甕棺墓への変遷が認められるとした。

(2). 第2次調査 (1976年5～7月) 『中・寺尾遺跡』大野城市教育委員会 1977

調査区の東半部で竪穴住居跡12軒、竪穴状遺構6基、土坑墓1基、石棺1基が検出された。西半部で甕棺墓27基、土坑墓19基が検出された。土坑墓9基と甕棺墓6基から副葬小壺が出土した。土坑墓の副葬小壺は板付Ⅱb式に属し、1次調査の所見より存続年代が一時期下がることが判明した。また、甕棺墓副葬小壺は土坑墓副葬小壺より若干新しく前期後葉～末に位置づけられる。甕棺は一型式として設定できるものである。住居跡は弥生時代中期中葉～中期後半に属す。

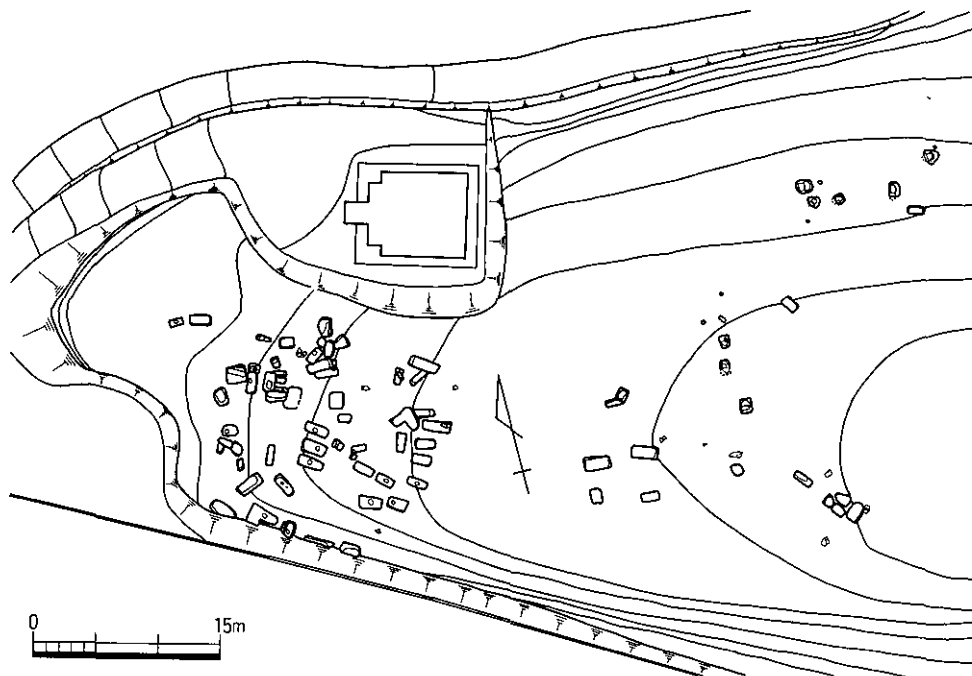
(3). 第3次調査 『中・寺尾遺跡』大野城市教育委員会 1977

住居跡4基、貯蔵穴2基、土坑3基、土坑墓2基、石蓋土坑墓2基が検出された。竪穴住居跡は弥生時代中期と古墳時代中期のものがあって、本遺跡が弥生時代だけではなく、古墳時代の遺構もあることがわかった。土坑墓は弥生時代中期をさかのぼらない時期、石蓋土坑墓は弥生時代後期に属すると考えられている。

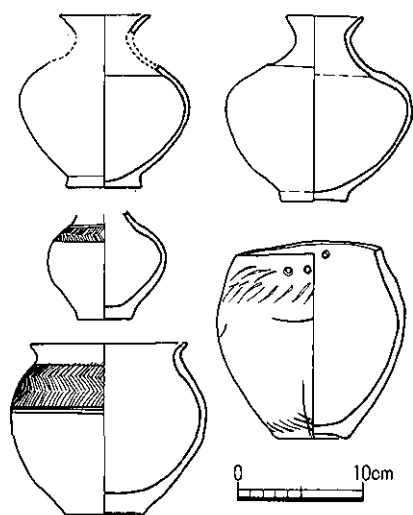
(4). その他

『九州考古学』15 (1962年) に渡辺正気氏と小田富士雄氏の連名で「筑紫郡大野町発見の古式弥生土器」という紹介記事がある。これは1958年 (昭和33年) 大野町の大字中の道路新設工事に伴い、鈴木基親氏と亀井勇氏が採集された弥生土器の紹介である。状況から考えて中・寺尾遺跡のことと思われる。6個の弥生前期の壺が載せられている (第5図)。

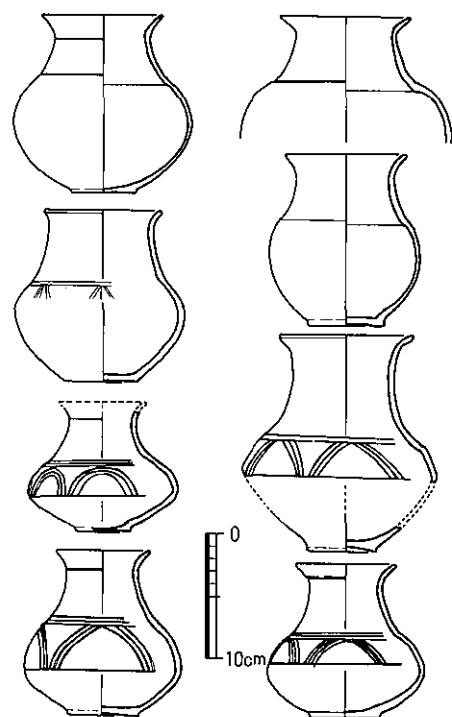
〈註1〉



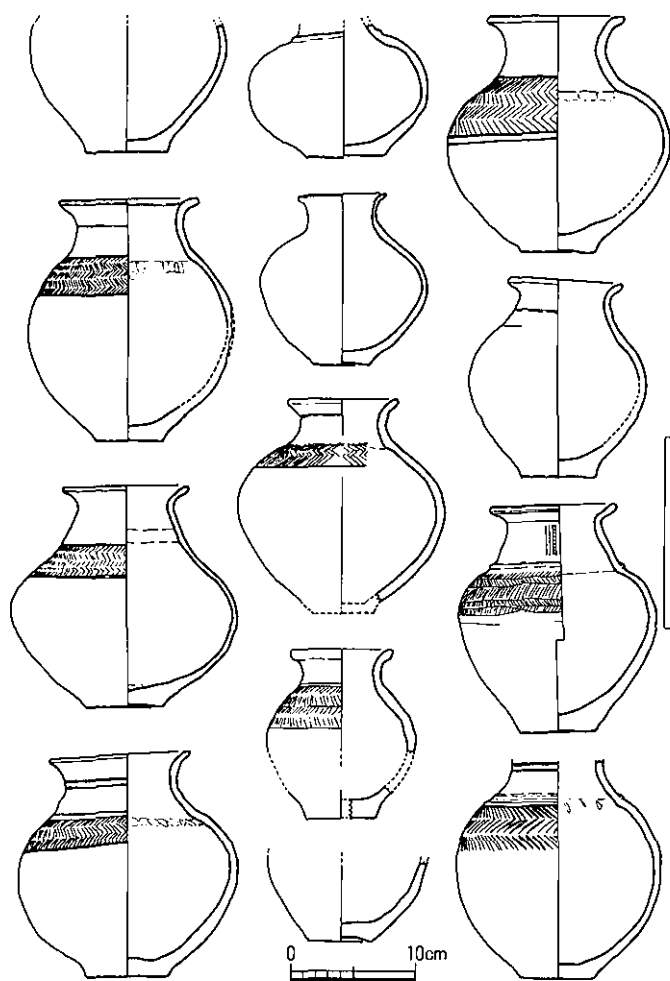
第4図. 第1次調査遺構配置図 (1/600)



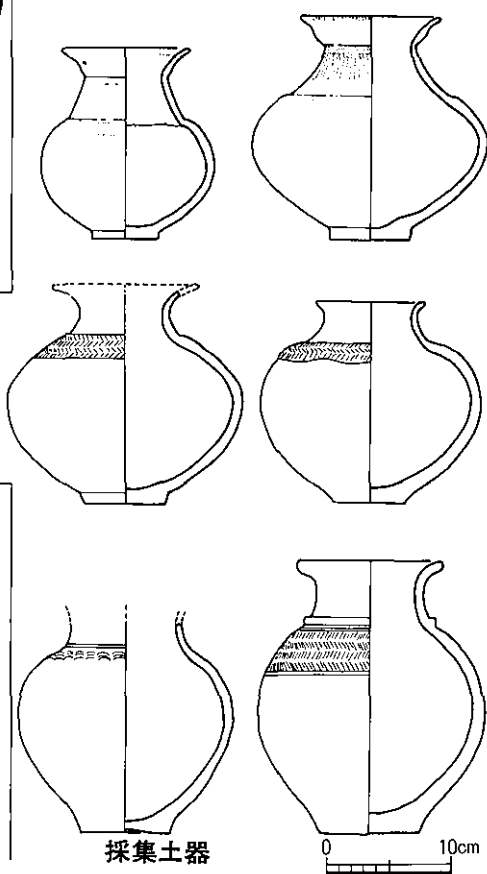
1次調査出土土器(I区甕棺墓副葬)



1次調査出土土器(II区土坑墓副葬)



2次調査出土土器



採集土器

第5図. 既往の調査で出土した副葬小壺、採集土器 (1/6)

2. 注目点

(1). 遺構

小壺が副葬されていたことから土坑墓の時期が判明し、弥生時代前期の墓制について前期前半は土坑墓、前期後半は甕棺墓と土坑墓という変遷が認められた（第5図）。

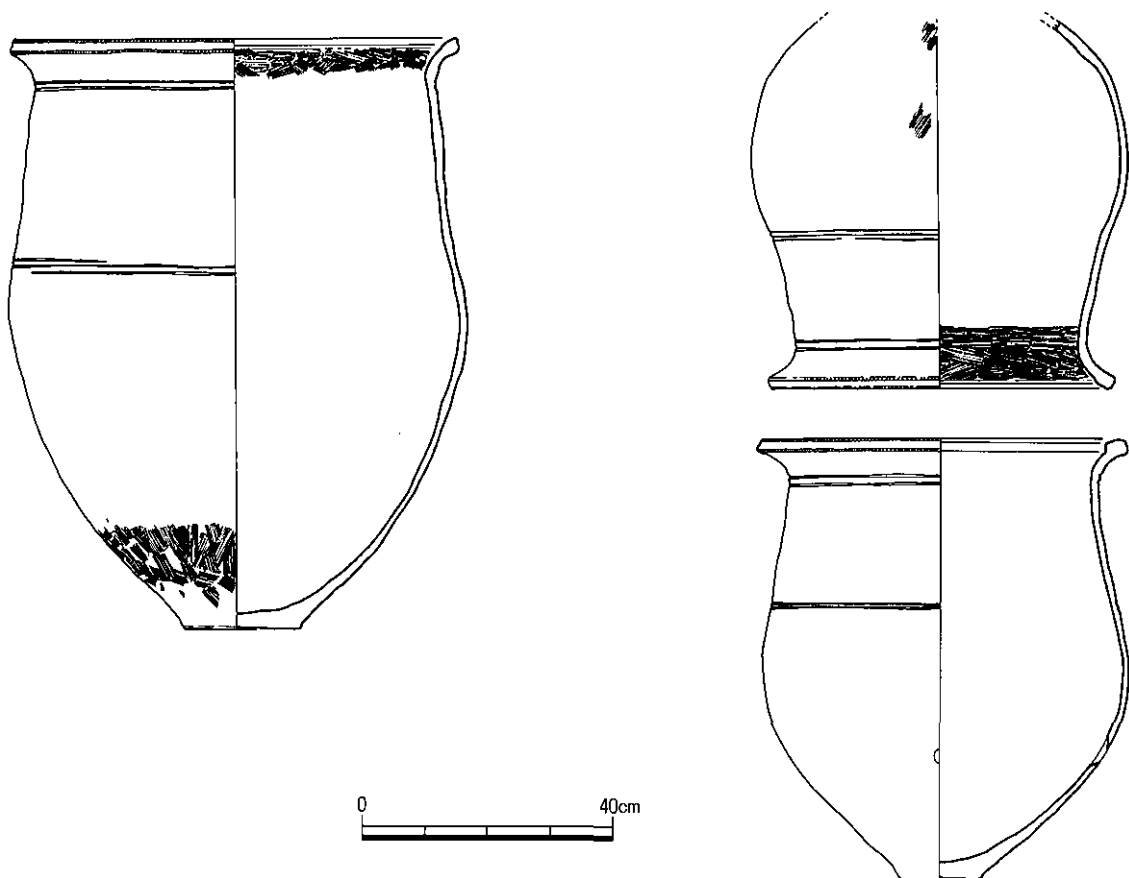
また、柳田康雄氏は1次調査で検出された甕棺墓と土坑墓について、四群の方形区画があり、最も明瞭な一群は19×18mの長方形内に52基の土坑墓と10基の小児甕棺墓が埋葬されているとした。そして、その中に板付Ⅰ式の小壺が副葬されているものがあることから、福岡県夜須町東小田峯遺跡例と共に弥生時代前期前半の長方形区画墓の例とされている（第4図）。
〈註2〉

(2). 遺物

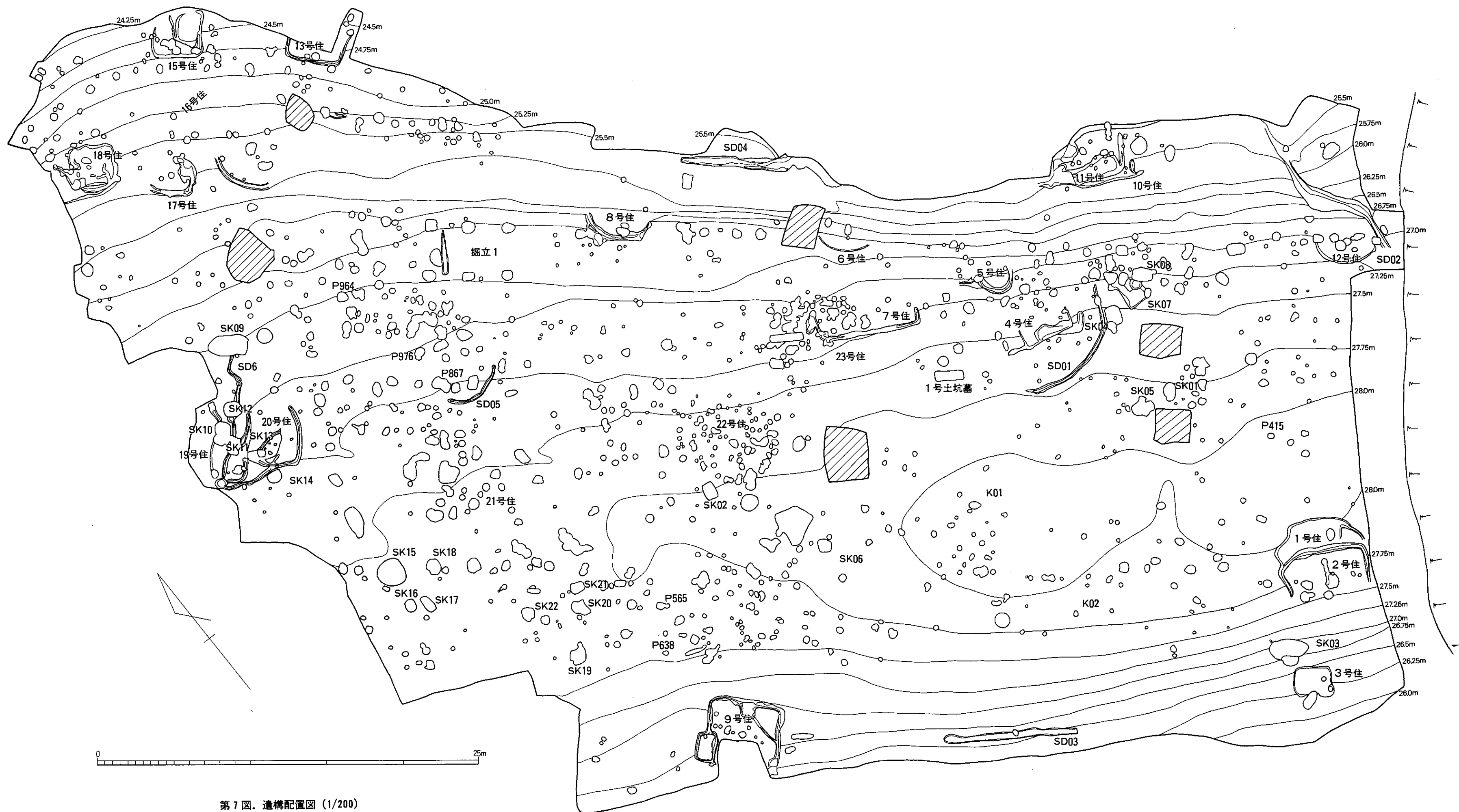
本遺跡からは副葬小壺が多く出土しているが、1次調査当時は副葬小壺の出土例がまだ少なく、墓制の変遷を知る上からも大変注目された。

また、出土した甕棺は前期のものも多く、壺からの変遷が見て取れるものもあり、橋口達也氏は甕棺の編年案において2次調査で出土した2号・17号甕棺を前期KⅠb期の典型例とされている
〈註3〉
（第6図）。

〈註1〉、渡辺正気・小田富士雄「筑紫郡大野町発見の古式弥生土器」『九州考古学』15 1962



第6図. 第2次調査出土甕棺実測図（1/12）



第7図. 遺構配置図 (1/200)

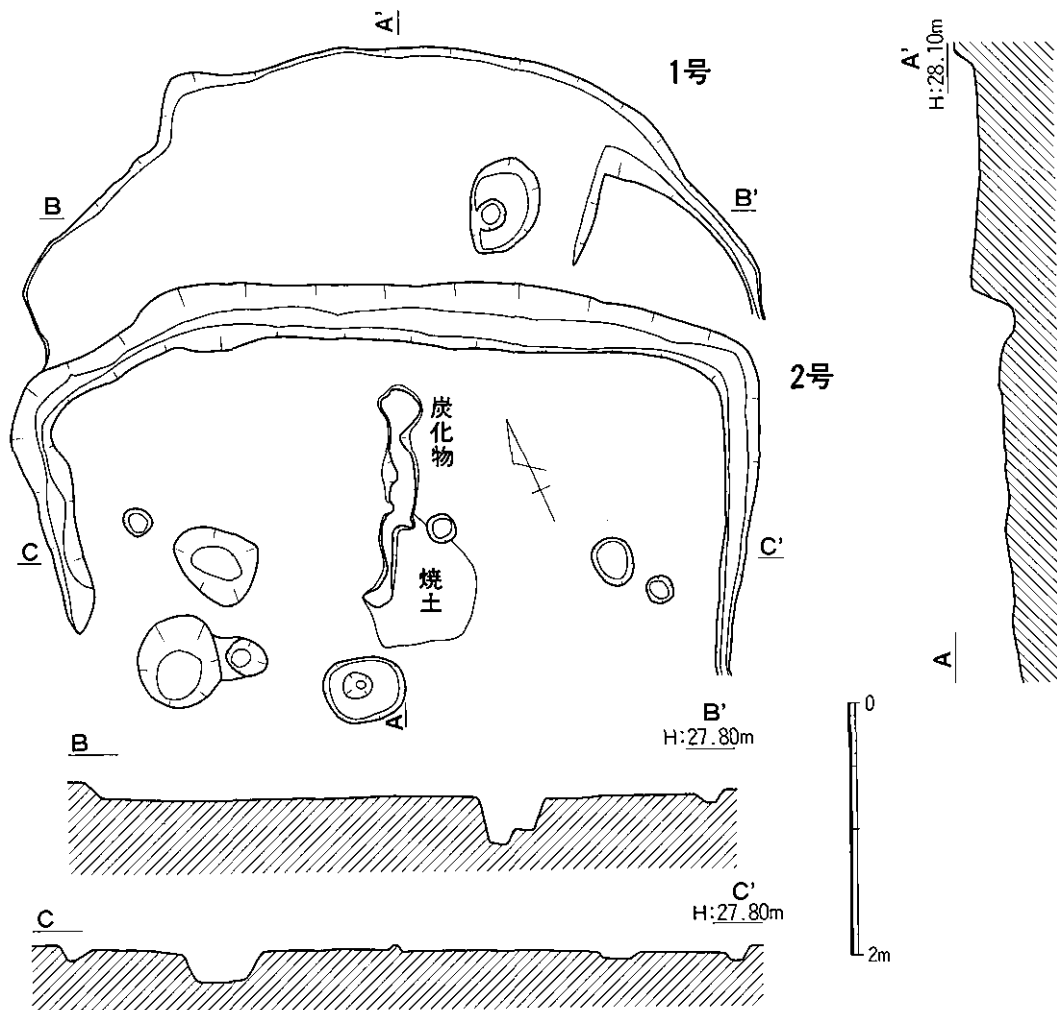
〈註2〉、柳田康雄「北部九州の古墳時代」『日本の古代5・前方後円墳の時代』1986

〈註3〉、橋口達也「Ⅳ-4 甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI
1979 福岡県教育委員会

Ⅳ．調査の結果

1. 調査概要

検出された遺構は竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡1軒、土坑22基、甕棺墓2基、土坑墓1基、溝6条、ピット多数である。しかし、立地が丘陵上ということもあって、尾根頂部はだいぶ削平を受けており、竪穴住居はもっとあった可能性がある。また、出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製品（石鏃・紡錘車・砥石）であるが、弥生土器が最も多く、土師器は少量、須恵器はごく少量である。全体でも整理箱10箱分ほどの量である。各遺構の年代については、Ⅳ章のまとめに記すが、今回の調査で検出された遺構は弥生時代のものがほとんどで、古墳時代・平安時代のものが若干含



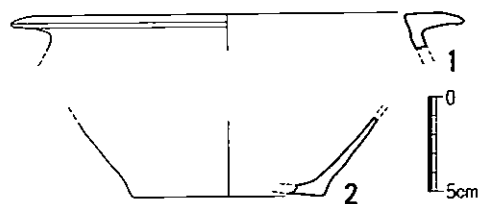
第8図. 1号・2号住居跡実測図 (1/60)

まれている状況にある。

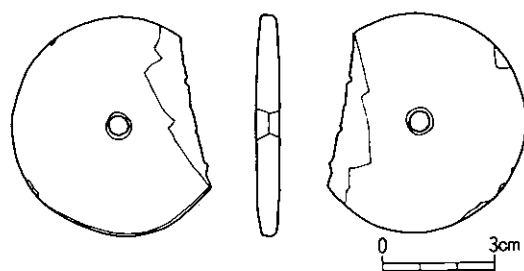
2. 遺構と遺物

(1). 竪穴住居跡

22軒検出された。斜面という立地の関係上削平を受け完全に残るものはない。特に丘陵頂部については、削平を受け、壁が消失したものもある。ピットが円形に巡ることから推定したものである。従って、実際にはもっと多かった可能性が考えられる。



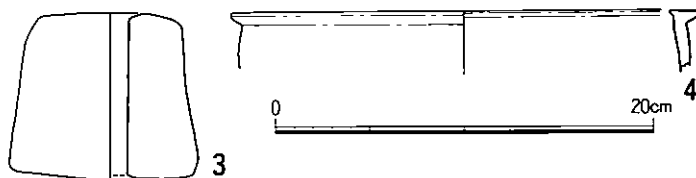
第9図. 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第10図. 1号住居跡出土土器実測図 (1/2)

1号住居跡 (第8図. 図版3(1))

発掘区南隅で検出されたものである。南側を2号住居跡に切られる。残りは悪いが、本来は円形の住居であったと推定できる。現況から判断して直径はおおよそ6mと考えられ



第11図. 2号・3号住居跡出土土器実測図 (1/4)

る。床面はおおむね平坦である。深さは5cmほどであるが、東側に一部周溝が残る。ピットは1個しか検出できなかったが、径65×55cm、深さ35cmを測る。

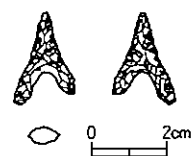
出土遺物 (第9・10図. 図版19)

弥生土器がビニール袋で4分の1程と石製紡錘車1個が出土した。

弥生土器 (1～2) 小片が多く、図示したのは甕と思われる2点のみである。

1は口縁部の小破片で、復元口径25.2cmを測る。平坦口縁であるが、内側には突出しない。2は底部の小破片で、復元底径10.2cmである。どちらも調整は器面の荒れのため不詳である。

紡錘車 薄い緑色の斑点が入った白色の石で作られている。一部欠けるが径5.8cm、中心部の厚さ6mmの大きさで、作りはていねいである。孔の大きさは6.5mmほどで両面からの穿孔である。



第12図. 2号住居跡出土土器実測図 (1/2)

2号住居跡 (第8図. 図版3(1))

1号住居跡を切る形で検出されたものであるが、斜面下部に当たる南側は消失している。方形を呈し、残りの良い北側で1辺約5.9mを測る。床面はおおむね平坦であるが中央部の変色部分は炉跡と思われる。周溝が巡るが、残りの良い北側で幅約50cmを測るが、徐々に狭まり、南東隅では幅10cmとなる。深さは約7cm程度である。ピットは大小8個が検出されたが、住居跡全体が残っているわけではないので、柱穴の断定はできない。ほぼ中央部に細長い炭化物があったが、建築部材が焼けたものの可能性がある。

出土遺物 (第11・12図、図版18・19)

弥生土器がビニール袋で3分の1程と黒曜石製の石鏃1点が出土した。

弥生土器 (3) 小片が多い。図示したのは支脚で器高8.7cm、重さ約900gを測る。上端面と底面はほぼ平坦で一孔が貫通する。上端面で径約2.8cm、底面で径約2cmである。火を受けた痕跡は見いだせないが、器面の荒れが甚だしい。その他図示はできなかったが、平坦口縁を持つ高杯の小破片があった。

石鏃 黒曜石製で長さ2.5cm、幅1.6cm、重さ0.75gの大きさである。

3号住居跡 (第13図、図版3(2))

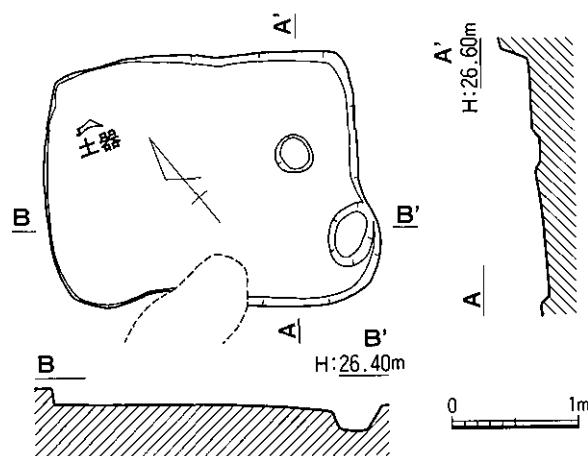
発掘区南隅で検出されたもので、2号住居跡からは西南へ約4.5mの位置になる。比較的残りが良いが、規模が小さく、住居跡としてよいか疑問がある。長方形を呈し、主軸長2.5×2.0mを測る。壁高は斜面上部に当たる北東側が約20cm、斜面下部に当たる南西側が約5cmである。床面は斜面の傾斜に合うようにやや傾斜しているのが住居跡としては気になる。ピットは南東側で2個検出されたが、浅いものである。

やや浮いて弥生土器が出土している。

出土遺物 (第11図)

弥生土器が1片出土している。

弥生土器 (4) 甕の口縁部と思われる小破片である。口縁部は直角に折れ曲がり平坦面を持つが、外側にあまり突出しない。調整は不詳である。



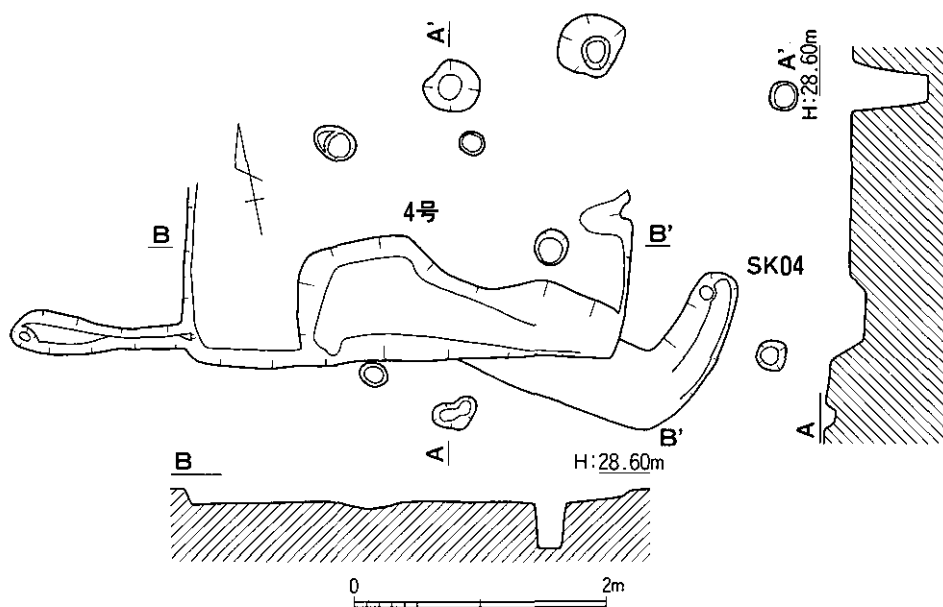
第13図. 3号住居跡実測図 (1/60)

4号住居跡

(第14図、図版4(1))

1～3号住居跡とは反対側の斜面に位置する。

1号住居跡からは北へ約20mの位置になる。SK04を切っているが、斜面下部に当た



第14図. 4号住居跡・SK04実測図 (1/60)

る北側は消失している。方形を呈すると思われるが、西南隅に小溝が付く。関係はわからない。残りの良い東西長は約3.5mを測る。床面はおおむね平坦である。ほぼ中心部に黒変して固い部分があるが、炉跡と思われる。ピットはいくつかあるが、柱穴はどれかはっきりしない。4号住居跡の斜面上位にある細長く弧を描く溝S D01は本住居跡の排水溝の可能性が考えられる。

出土遺物

弥生土器がビニール袋4分の1程と黒曜石の破片が少量出土したが、小片で図示できなかった。ただ中に口縁部の破片があったが、外へ短く折れ曲がるものであった。

5号住居跡 (第15図、図版4(2))

4号住居跡の北約5mに位置する。半円形に巡る溝が検出されたことよりこれを周溝として住居跡と考えたものであるが、規模が小さいことと柱穴が確定できないこと、床面が平坦ではないことなどから、疑問のある遺構である。住居跡とすると、溝が描く円弧から推定できる直径は約2.7mほどとなる。溝は幅約40cm、深さ約10cmである。溝端部にあるピットは深さ約35cmを測る。床面は前述したとおり、平坦ではなく、斜面に添って傾斜している。

出土遺物

弥生土器がビニール袋少量と黒曜石の破片が少し出土したが、小片で図示できなかった。

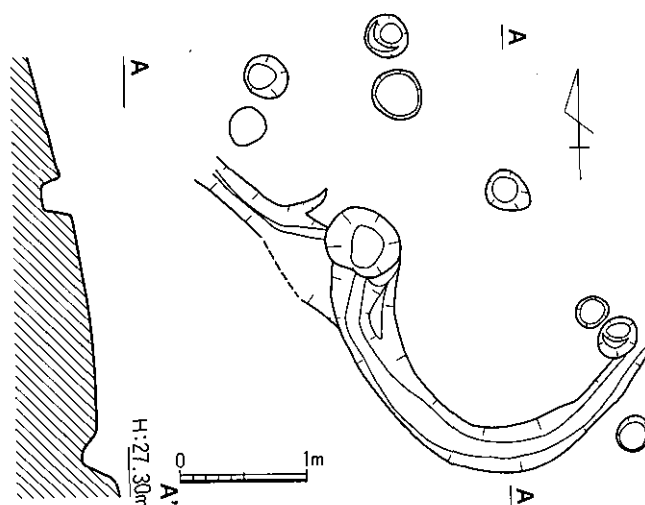
6号住居跡

(第16図、図版5(1))

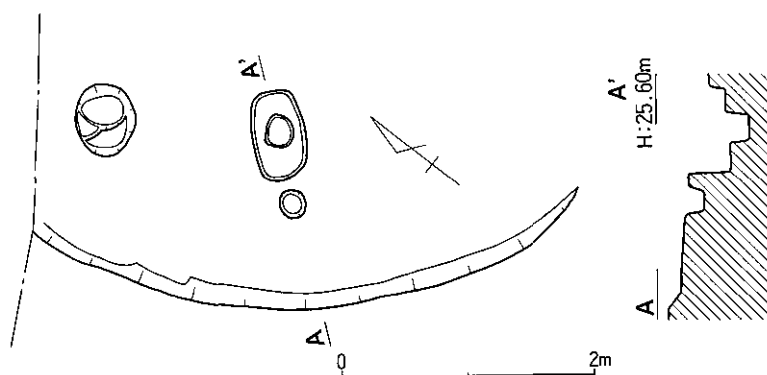
5号住居跡の北西約10mに位置する。約4.5mにわたって弧状に段差の見られたことから住居跡と考えたものである。これが住居跡とすると直径8mほどの円形の住居跡と推定できる。壁高は5~20cmで床面はおおよそ平坦である。ただ、ピットが少なく、柱穴の判断に困る。炉跡などは確認できなかった。

出土遺物

出土遺物はなかった。



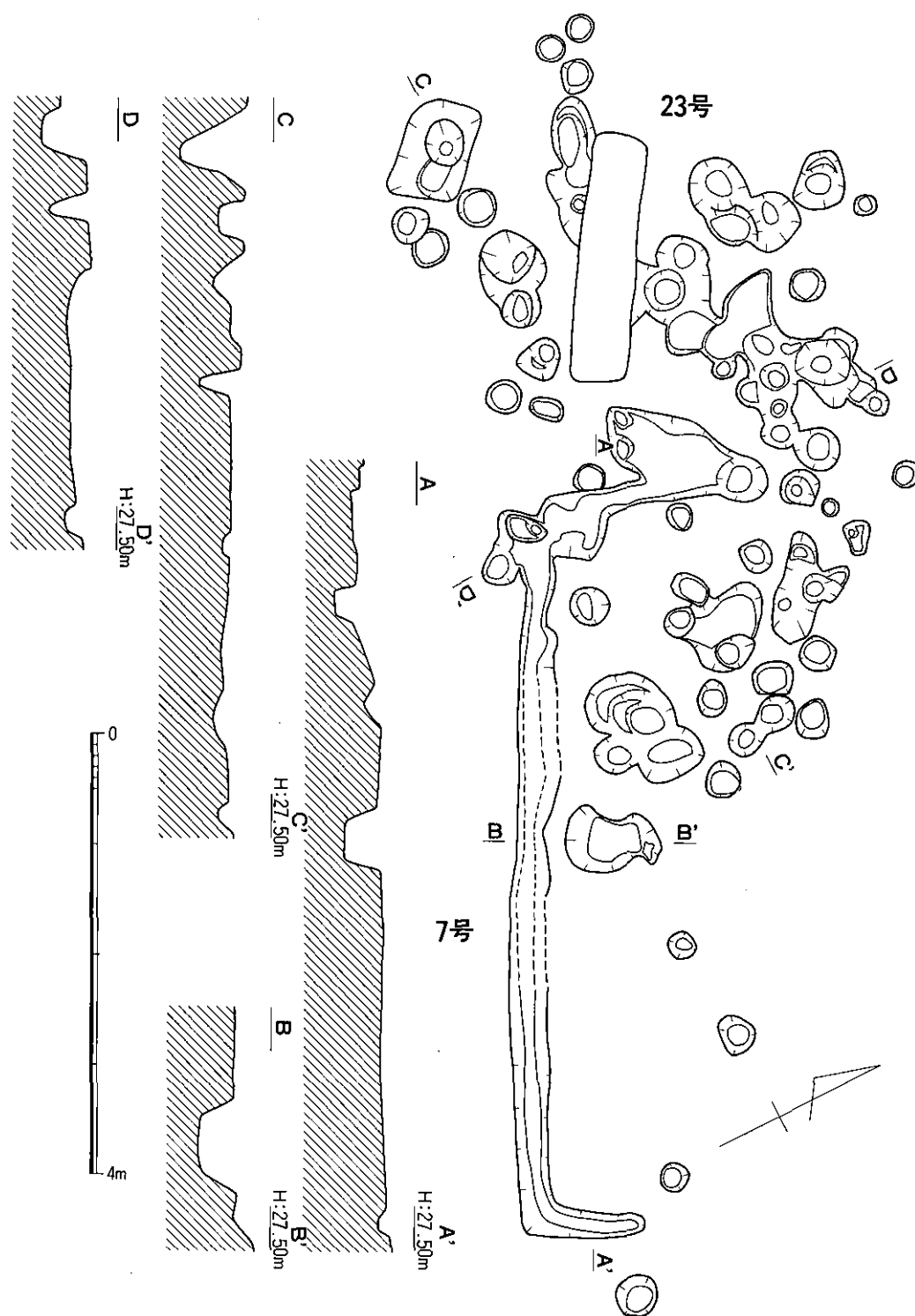
第15図. 5号住居跡実測図 (1/60)



第16図. 6号住居跡実測図 (1/60)

7号住居跡（第17図、図版5(2)・6）

6号住居跡の南西約3mで6号住居跡より上位に位置する。西側が22号住居跡と切り合う。やはり、斜面下部に当たる北側が消失している。残存部分から方形の住居跡と考えられるが、残りの良い1辺は6.7mを測る。壁高は約15～25cmで、周溝は幅約30cm、深さ約10cmである。床面はおおむ



第17図. 7号・23号住居跡実測図 (1/60)

ね平坦であるが、炉跡と思われる部分は検出できていない。ピットは多いが、柱穴の確定はできなかった。周溝からは比較的土器がまとまって出土した（第18図、図版6(1)）。

出土遺物（第19・20図、図版18）

主に周溝から土師器の出土を見た。整理箱で1箱分程の量である。風化が進んでおり、復元が難しかった。口縁部破片から考えて壺が一番多いようだ。他に碗・高杯がある。

土師器

壺（5～8） 5～7は頸部の短い広口の壺の口縁部と思われるものである。いずれも小破片で器面の荒れも大きく、調整がはっきりしないが、ナデと思われる。8は全体の3分の2ほど残存する小型の壺である。それほどいいねいに作られたものではない。器面の荒れのため調整は不詳である。

高杯（9） 脚部の小破片である。わずかに外側にふくらむ。これも器面の荒れのため調整は不詳である。

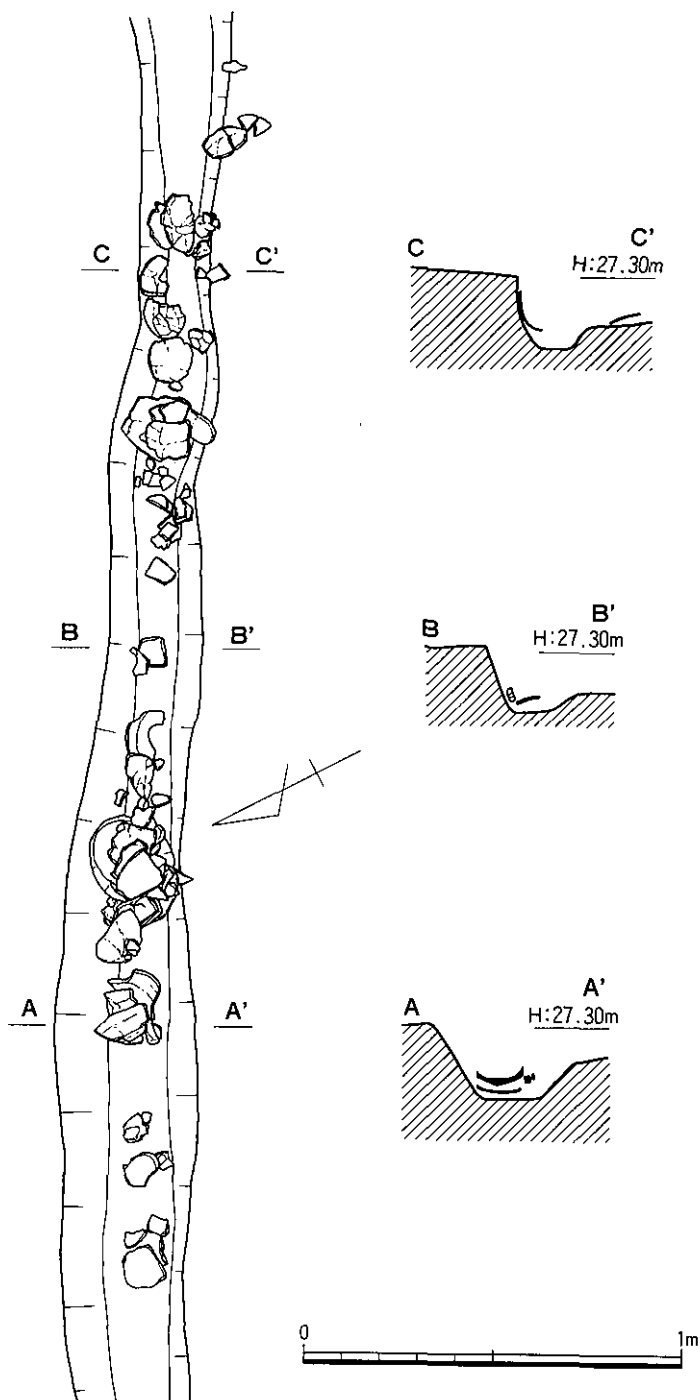
碗（10～13） 全体に丸みを持つものであるが、10と11は口縁端部がやや外側に屈曲し、12・13は屈曲しないものである。調整はナデと思われるが、器面の荒れのため不詳である。

石製品

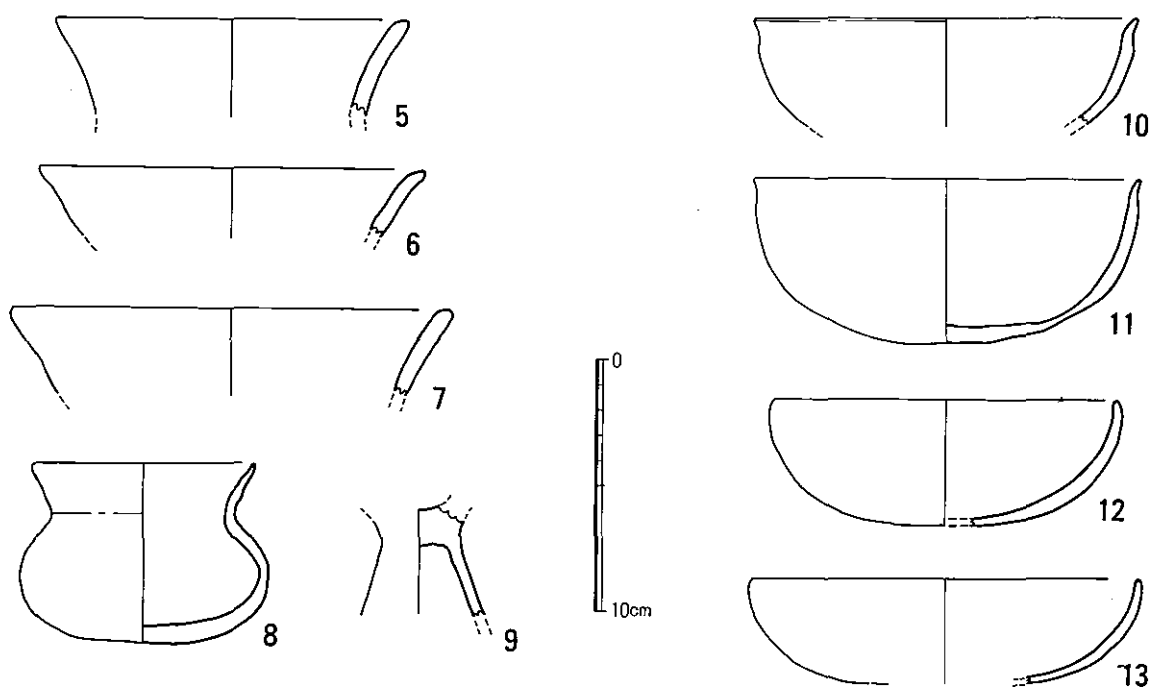
砥石 広い面2面だけでなく、狭い4面も平滑になっており、使用された可能性がある。

8号住居跡（第21図、図版7(1)）

7号住居跡の北西約12mに位置する。壁の立ち上がりと弧状に巡る溝を周溝と考え、住居跡としたものである。斜面下部に当たる北東側が消失している。円形の住居跡と考えられるが、残存部から推定すれば直径約5mほどと考えられる。壁高は15



第18図。7号住居跡遺物出土状態実測図（1/20）



第19図. 7号住居跡出土土器実測図 (1/3)

～25cm、周溝は幅約40cm、深さ10～30cmである。床面はおおむね平坦であるが、炉跡の痕跡は検出できなかった。柱穴は確定できなかった。

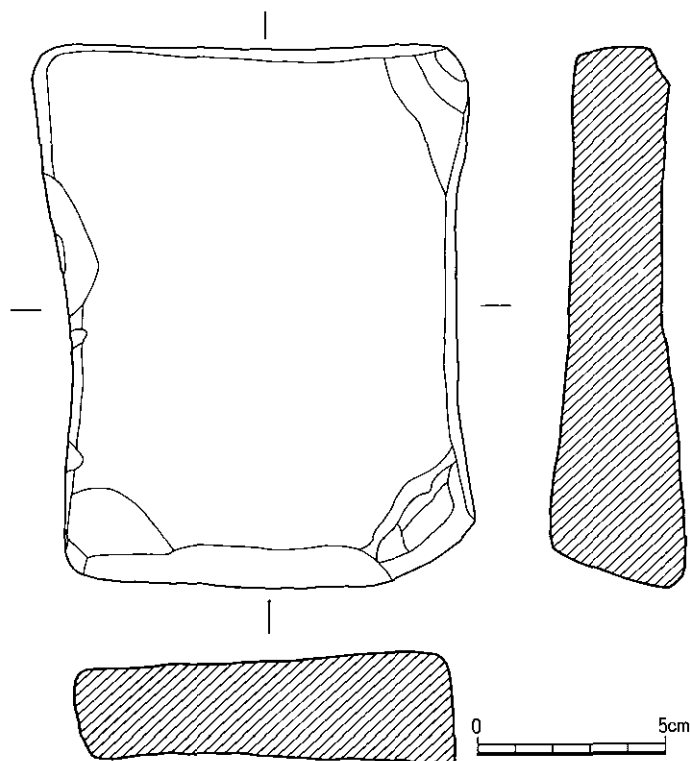
出土遺物

弥生土器・土師器・黒曜石片が少量出土した。いずれも小破片のため図示できなかった。

9号住居跡 (第22図. 図版7(2))

4～8号住居跡のある斜面とは逆の斜面、つまり1～3号住居跡の立地する斜面に位置する。3号住居跡の西北西約33mの位置になる。樹木のため掘れなかった部分がある。西南壁に張り出しのような部分があるが、方形の住居跡として良いであろう。

北東の1辺約5m、西南の1辺約4.5mを測る。周溝が巡るが、東南辺の中央部に方形の浅い落ち込みがあってつながる。また、西南部の張り出し部分は約1.9×1.4mの大きさである。住居跡内部を斜めに走る溝については、その意味が良くわからない。床面は西南から北東へ向けてやや傾斜する。ピットはあるが、柱穴については確定できない。炉跡は検出できなかった。



第20図. 7号住居跡出土石器実測図 (1/2)

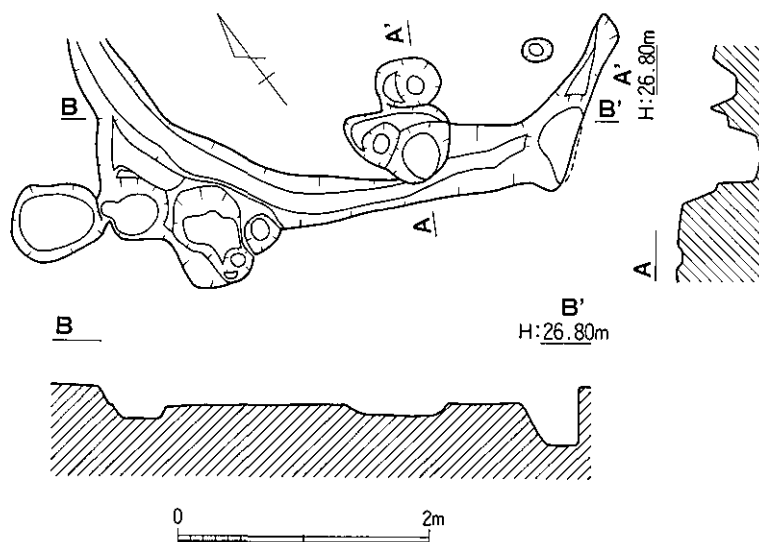
出土遺物（第23図、図版18）

弥生土器がビニール袋4分の1ほど出土した。かなり風化が激しい。

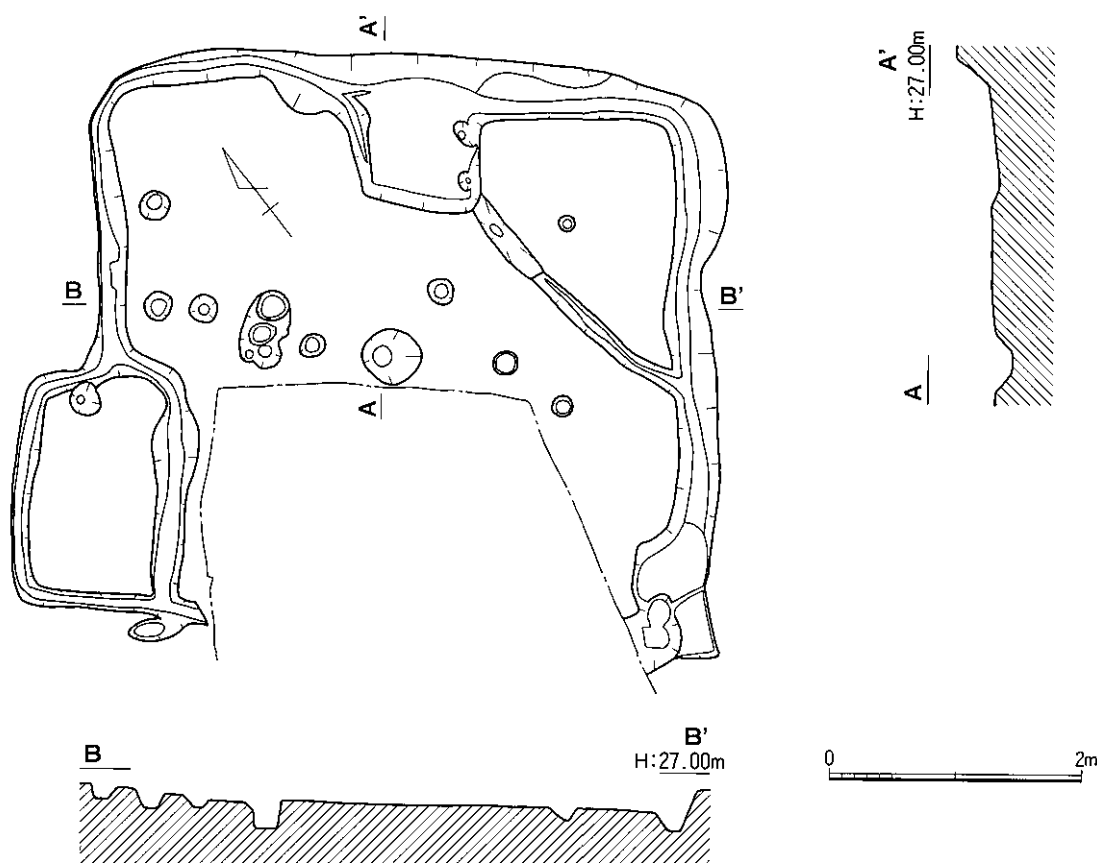
弥生土器（14～17） 壺の口頸部と底部と思われる破片である。いずれも風化のため調整不詳である。底部を見ると、体部は一旦内湾せずにそのまま立ち上がっていくところに特徴がある。

10号・11号住居跡（第24図、
図版8(1)）

9号住居跡とは違い、4～8号住居跡のある斜面に位置する。4号住居跡の下方約8mの位置になる。両方とも方形を呈し、基本的には周溝を持つものと思われる。2つの住居跡は切り合うが先後関係はわからなかった。床面はおおむね平坦であるが、炉跡は検出できなかった。柱穴も断



第21図. 8号住居跡実測図（1/60）



第22図. 9号住居跡実測図（1/60）

定できる状況ではなかったが、側壁と平行な位置にあるピットがそれと考えられるのではないかと
思う。

出土遺物

両住居跡からは遺物の出土がなかった。

12号住居跡（第25図、図版8(2)）

10号住居跡の南東約12mに位置する。側壁の残り具合から円形の住居跡と考えたものである。推定直径は約4mである。床面はおおよそ平坦であるが、炉跡などは検出できなかった。ピットは方形かそれに近いものが多いが、柱穴は不明である。

出土遺物

12号住居跡からは遺物の出土がなかった。

13号住居跡

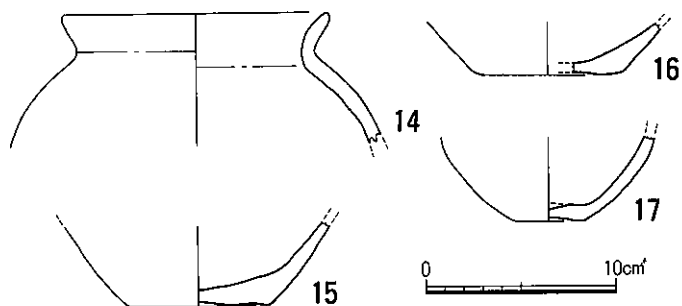
（第26図、図版9）

8号住居跡の北北西約19mに位置する。北側は池に近く調査できなかった。周溝を持つ方形の住居跡と考えた。残りの良い1辺は約3.8mである。床面は東側から西側にかけてやや傾斜する。柱穴は南側壁に接して掘られているピットがそれの1つに当たるのではないかとと思われる。

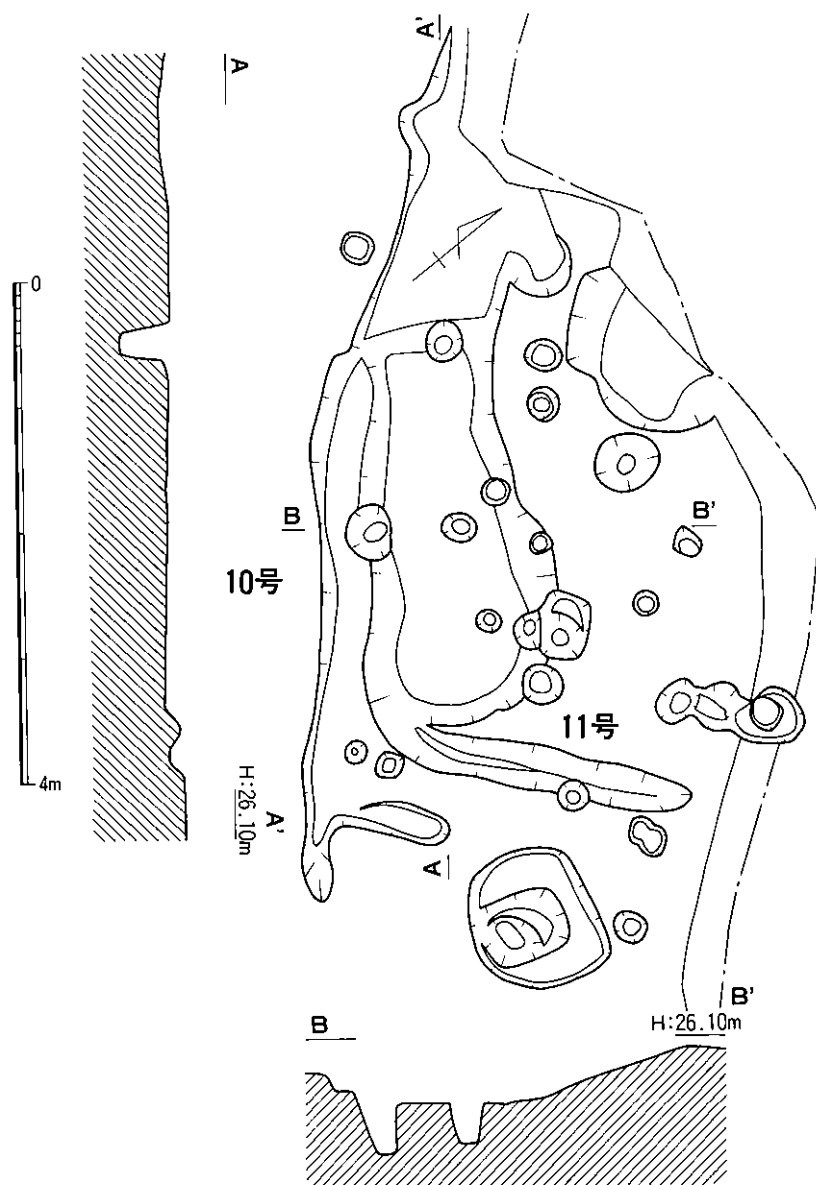
出土遺物

（第27図、図版18）

弥生土器がビニール袋1袋分ほど出土した。ほとん



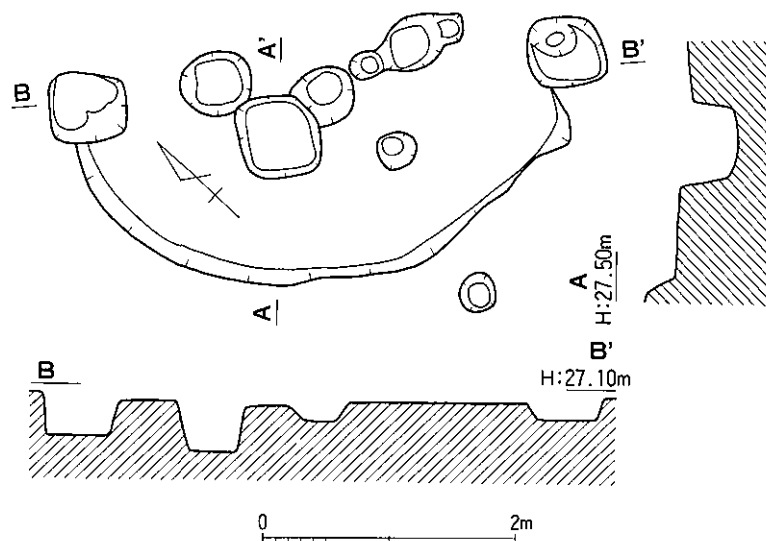
第23図. 9号住居跡出土土器実測図（1/4）



第24図. 10号・11号住居跡実測図（1/60）

どが甕と思われるが、器面の荒れが著しい。

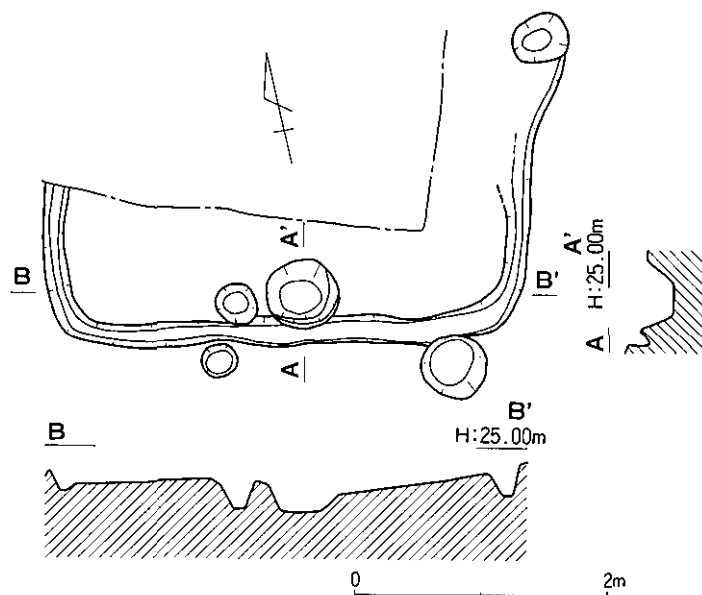
弥生土器（18～20） 18は甕の口縁部であるがあまり発達していない平坦口縁を持つ。内面は強いナデによってやや突出する。19・20は甕の底部と思われる破片である。器面の荒れのため、調整不詳である。



15号住居跡

（第28図、図版9(1)）

13号住居跡の北西約5.5mにあって、発掘区北端に位置する。方形住居跡である。斜面下方の壁が消失しているが、およそ3.1×3.1mの大きさである。南西辺を中心に周溝が巡るが、ごく浅いものである。床面はやや傾斜を持つ。炉跡は検出できなかった。柱穴は断定しにくい、南西辺の中央部や南隅にあるピットがその可能性を持つと思われる。



第26図. 13号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

小破片のため不明のものもあるが主に弥生土器がビニール袋3分の2ほど出土した。かなり風化が激しく図示できなかった。

16号住居跡（第29図、図版10(2)）

13・15号住居跡の斜面上位に位置するが、15号住居跡の南約7m付近に当たる。弧を描く壁面と周溝と思われる小溝があることから、円形住居跡と考えたものである。残存部分は少ないが、推定できる直径は約5mである。周溝の深さは10cm以下で浅い。柱穴は壁に沿って円形に掘られていると思われる。

出土遺物

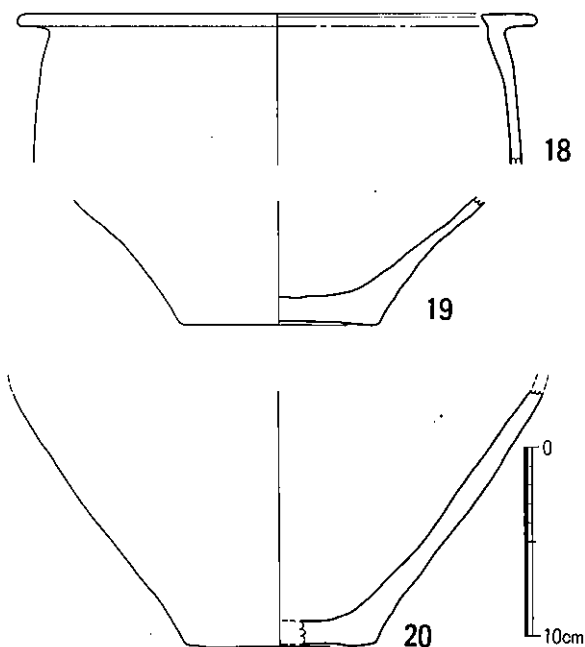
本住居跡からは遺物の出土がなかった。

17号住居跡（第30図、図版11(1)）

16号住居跡の北西隣に位置する。溝が丸みを持ちながらもほぼ直角に曲がる状況で検出されたことから、長形状の住居跡と考えたものである。溝の西端部分が角になるとすれば、およそ2.5×3.5m程の大きさが考えられる。床面はおおよそ平坦であるが、やや斜面下部側が下がる。炉跡は検出できなかった。柱穴は中央部のピットがその1つの可能性があるが、その他についてはわからない。

出土遺物

弥生土器がビニール袋で5分の1ほど出土した。小破片で図示できなかったが、中期の後半頃と思われる口縁部破片が含まれていた。



第27図. 13号住居跡出土土器実測図 (1/4)

18号住居跡（第31図、図版11(2)）

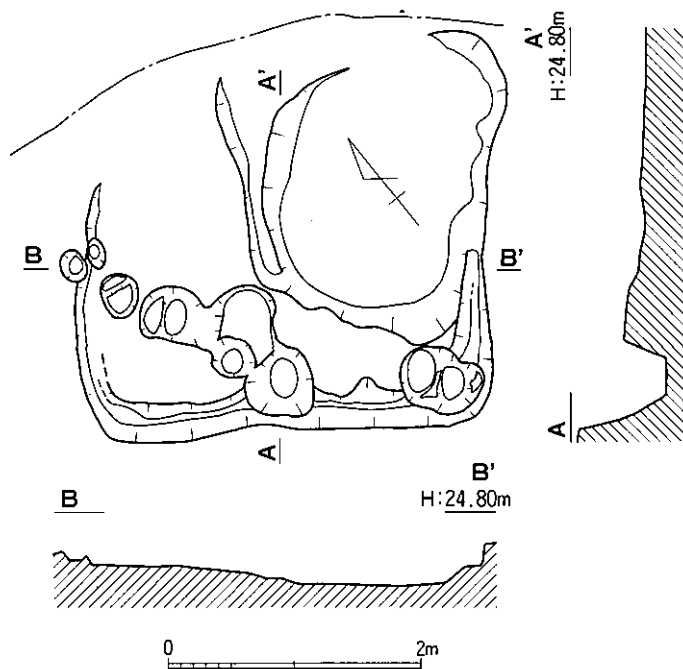
17号住居跡の北西側2mに位置する。方形の住居跡と考えられるが、溝と切り合っており、形態等にやや不明な点があるが、3.0×2.7m程の大きさと考えられる。周溝はないようだ。床面はおおむね平坦である。柱穴については、南北方向に並ぶピットが考えられるが、確証はない。炉跡は検出できなかった。

出土遺物（第32図）

弥生土器を主に整理箱で1箱ほど出土した。風化した小破片が多い。

弥生土器（21～27） 21・22は甕の口縁部で、どちらも平坦口縁を持つもの

である。どちらも内面の突出は少ない。23は壺の口縁部で、約7mmの円孔がある。24は甕の口縁部であるが、21・22に比べ、やや立ち上がる。25・26は底部であるが、傾きから推定すれば、25は壺、26は甕の可能性がある。すべて器面の荒れのため調整は不詳である。27は椀形の土器であるが、器壁の厚さ等から見て土師器とは考えにくい。



第28図. 15号住居跡実測図 (1/60)

19号・20号住居跡（第33図、図版12(1)）

16号住居跡の南南西（斜面上方）約15mに位置する。複雑に小溝が切り合っているが、住居跡2

軒、下方で3本に枝分かれする小溝1条、小溝と関連する可能性のある土坑（SK10～12）、そして意味不明の土坑（SK13・14）と考えた。

19号住居跡は遺構群の北西側の部分で、推定でおよそ2.2×3.0mほどの長方形の住居跡と考えた。しかし、床面はおおむね平坦であるが、炉跡や柱穴がはっきりしなく、疑問も残る。

20号住居跡は遺構群の南側の部分で南と西側の2辺が残る。やや胴張り気味の長方形を呈し、推定で約4×3.5mの大きさが考えられる。床面はおおむね平坦であるが、炉跡等は検出できなかった。柱穴も定かではない。

出土遺物（第34図）

19号住居跡からは弥生土器がビニール袋で2袋分ほど出土した。小破片が多く、また風化の著しいものがほとんどである。

弥生土器（28～33） 28は壺、30・31・33は甕、32は器種の断定はできないが底部、29は器台である。いずれも器面の荒れのため調整は不明である。

20号住居跡からは弥生土器がビニール袋で5分の1袋分ほど出土した。どれも小片で風化が激しく、図示できなかった。

21号住居跡（第35図）

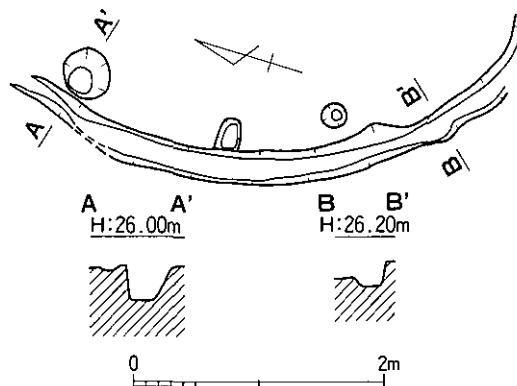
20号住居跡の南東側2mに位置する。ピットがほぼ円形に巡ることから住居跡と考えたものであるが、壁が検出されなかったため確実に住居跡なのかは疑問もある。しかし、およそ2.5m間隔に円形に並ぶピットが7個あり、これを柱穴とする直径7～8mの円形住居跡を十分に推定できる。ピットは西側で途切れる部分があり、入口との想定もできる。床面はほぼ平坦で、中央部に深さ約45cmの土坑がある。

出土遺物

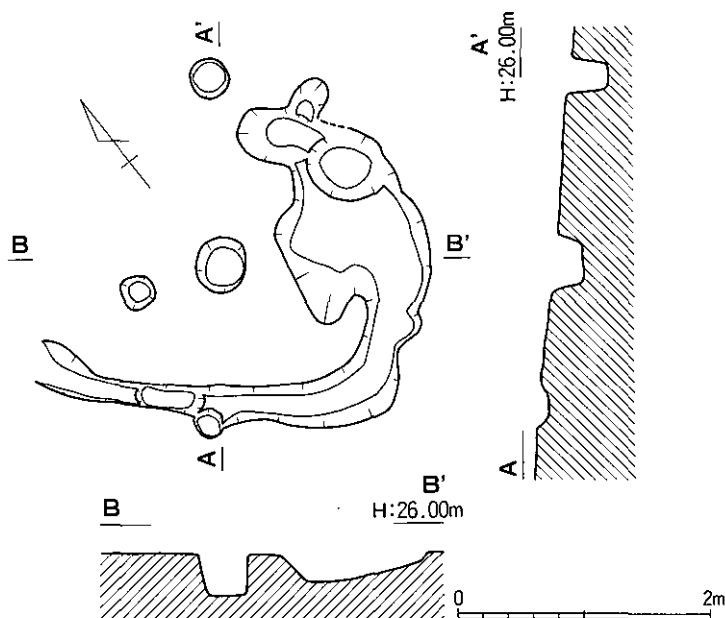
ピットから土器の小片が出土しているが、どれが住居跡に伴うものか不明であるし、また図示できるようなものではない。

22号住居跡（第36図、図版12(2)）

21号住居跡の南東側約11mに位置する。これも壁はないが、ピットが円形に並ぶことから住



第29図. 16号住居跡実測図（1/60）



第30図. 17号住居跡実測図（1/60）

居跡と考えたものである。1.5mほどの間隔で並ぶピットが柱穴ではないかと考えられるが、そうすると11個ほどになり、やや多すぎる。直径5mほどの円形住居跡が2基切り合っていることも考えられる。1基とすれば、直径は約7mほどと推定できる。どちらにしても、床面はほぼ平坦である。中央付近に21号住居跡ほど大きくはないが、落ち込みが見られる。

出土遺物

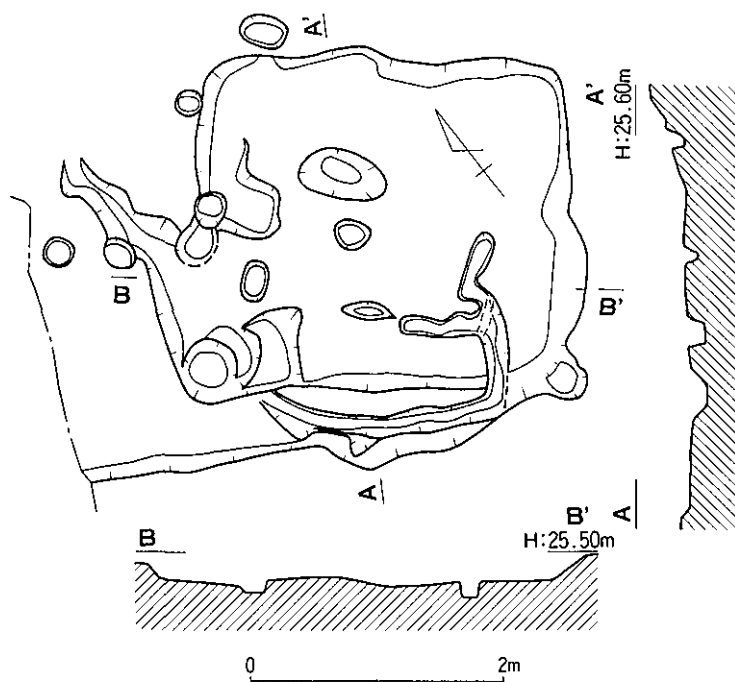
ピットから土器の小片が出土しているが、図示できるようなものではない。

23号住居跡（第17図、図版6(2)）

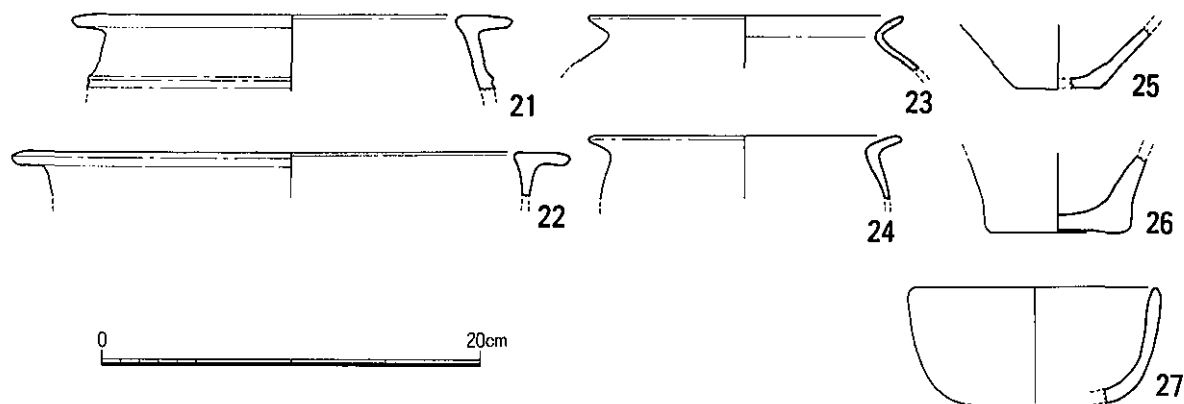
22号住居跡の東側約3mに位置し、7号住居跡と切り合う。これも壁はないが、ピットがほぼ半円形に並ぶことから住居跡としたものである。ただし、ピットは北側で半円形に並ぶが南側がないのが疑問である。またピットは数が多く、どれを柱穴とするか決め難い。7号住居跡との先後関係は不明である。

出土遺物

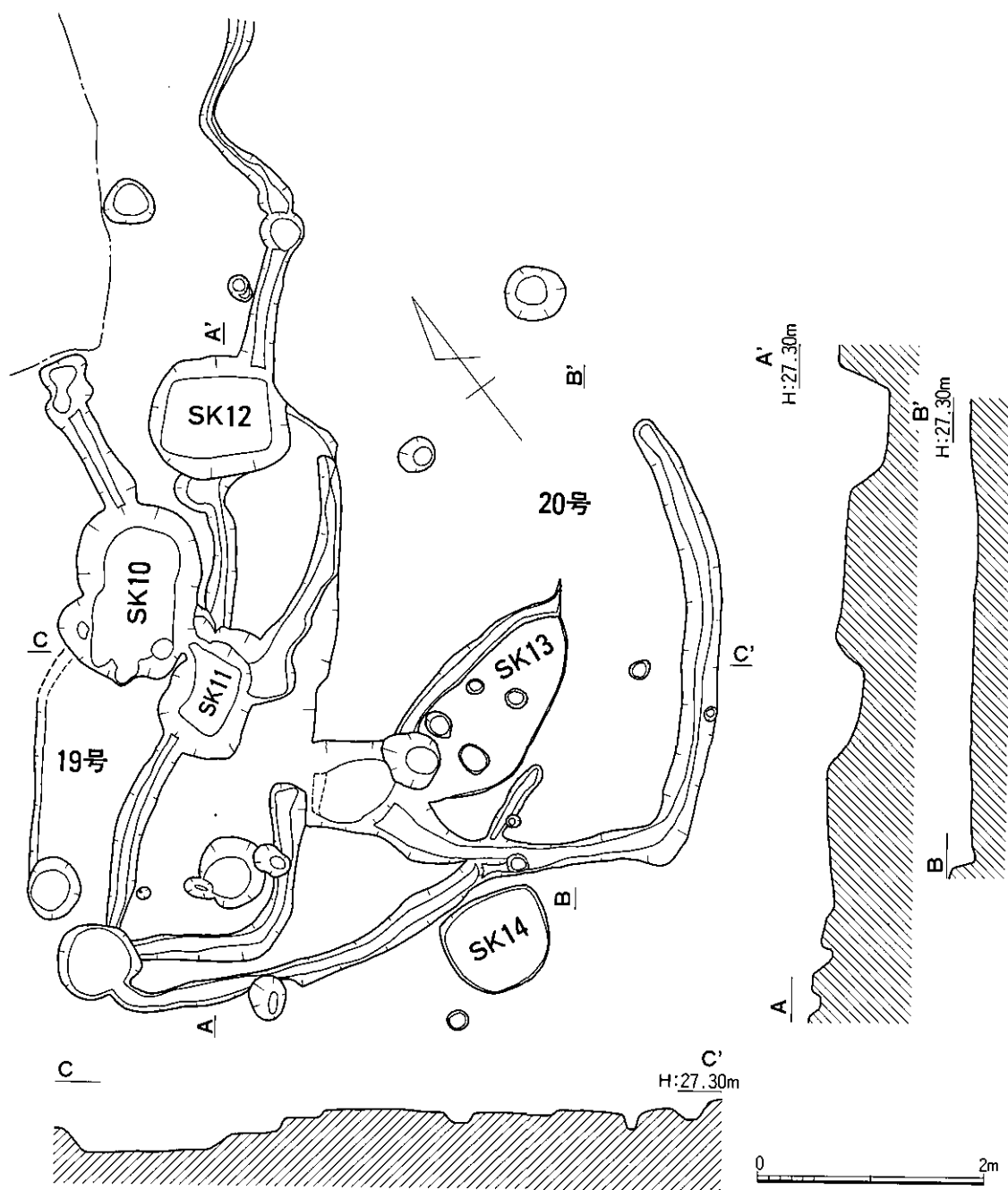
やはり、ピットから土器小片が出土しているが、ピットそのものが住居跡に付随するものか確定できないため、住居跡出土遺物の断定はできない。また、図示できるようなものもない。



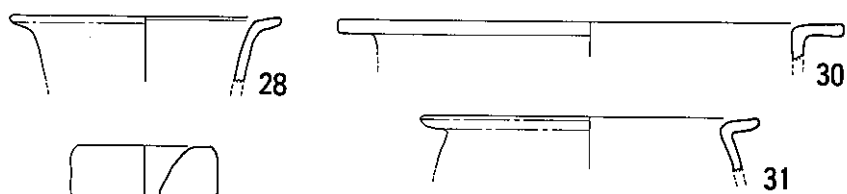
第31図. 18号住居跡実測図 (1/60)



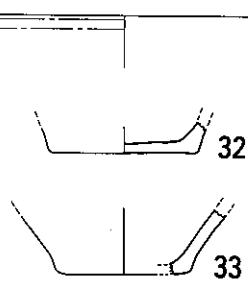
第32図. 18号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第33図. 19号・20号
住居跡実測図 (1/60)



第34図. 19号・20号住居
跡出土土器実測図 (1/4)



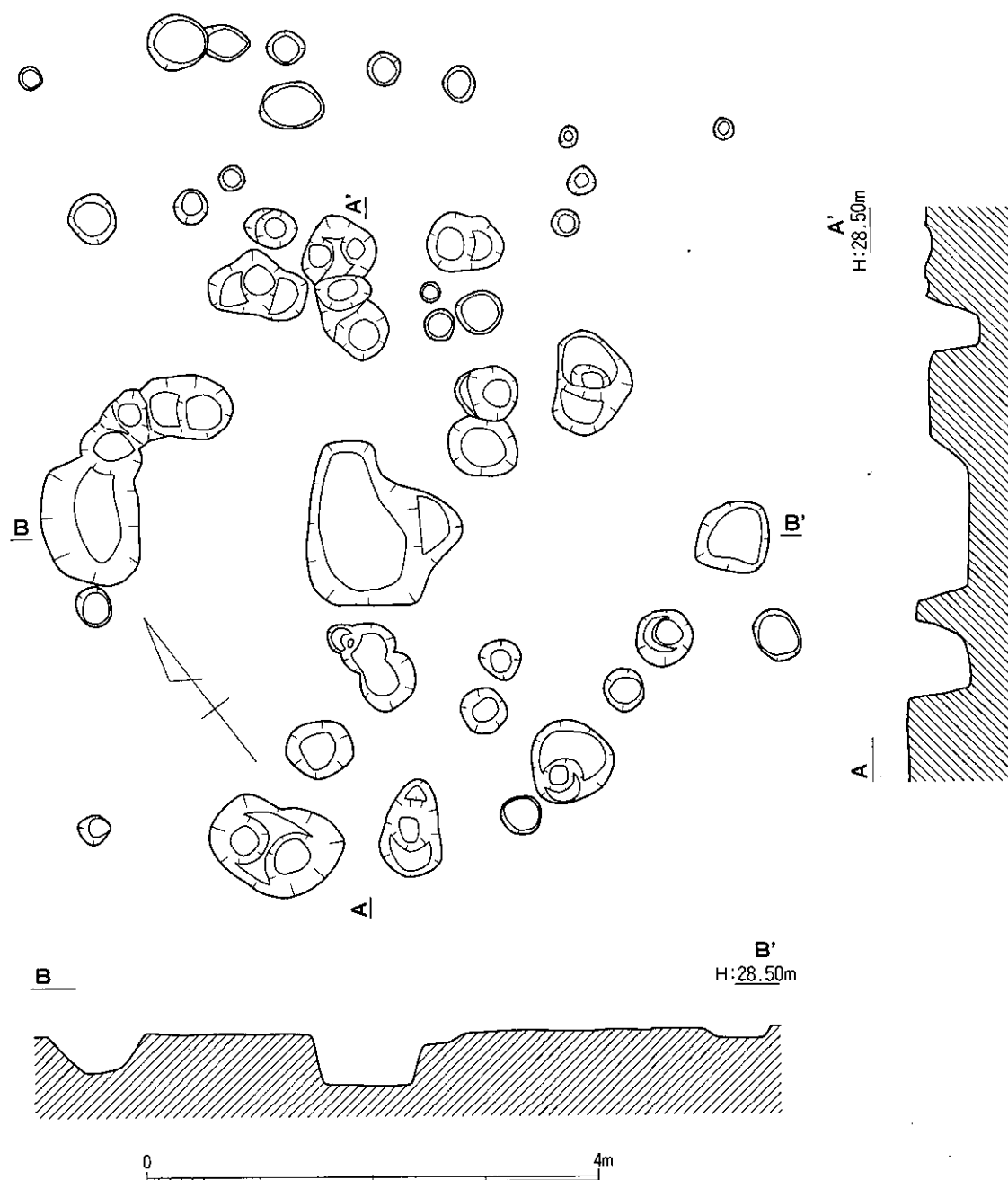
(2). 掘立柱建物跡

1棟検出された。東側斜面の中腹である。

1号掘立柱建物跡（第37図、図版13(1)）

8号住居跡の北西約8mの位置で検出された。1間×2間の掘立柱建物である。梁行は3.15m、桁行は5.15mを測り、桁行の1間は2.75mである。掘り方は方形か、丸みを持った方形を呈し、1辺約0.7～0.9mの大きさである。掘り方底にある窪みから柱の太さは20～30cmと推定できる。

出土遺物



第35図. 21号住居跡実測図 (1/60)

ピットのいくつかから弥生土器の小破片と黒曜石・サヌカイトの剥片がそれぞれ1点ずつ出土している。小片のため図示できなかった。

(3). 土 坑

ピットよりやや大きめの落ち込みを土坑としてSKを冠したが、01～22までの22基を検出した。形態はさまざまで性格は明らかではないが、形の整ったものと土器を出土したもの、合わせて6基について報告したい。

SK 02

ほぼ中央部に位置する。22号住居跡の西隣である。ほぼ長方形を呈し、主軸長で約 1.1×0.85 m、深さ約0.2mを測る。床面は中央部がやや深い。

出土遺物

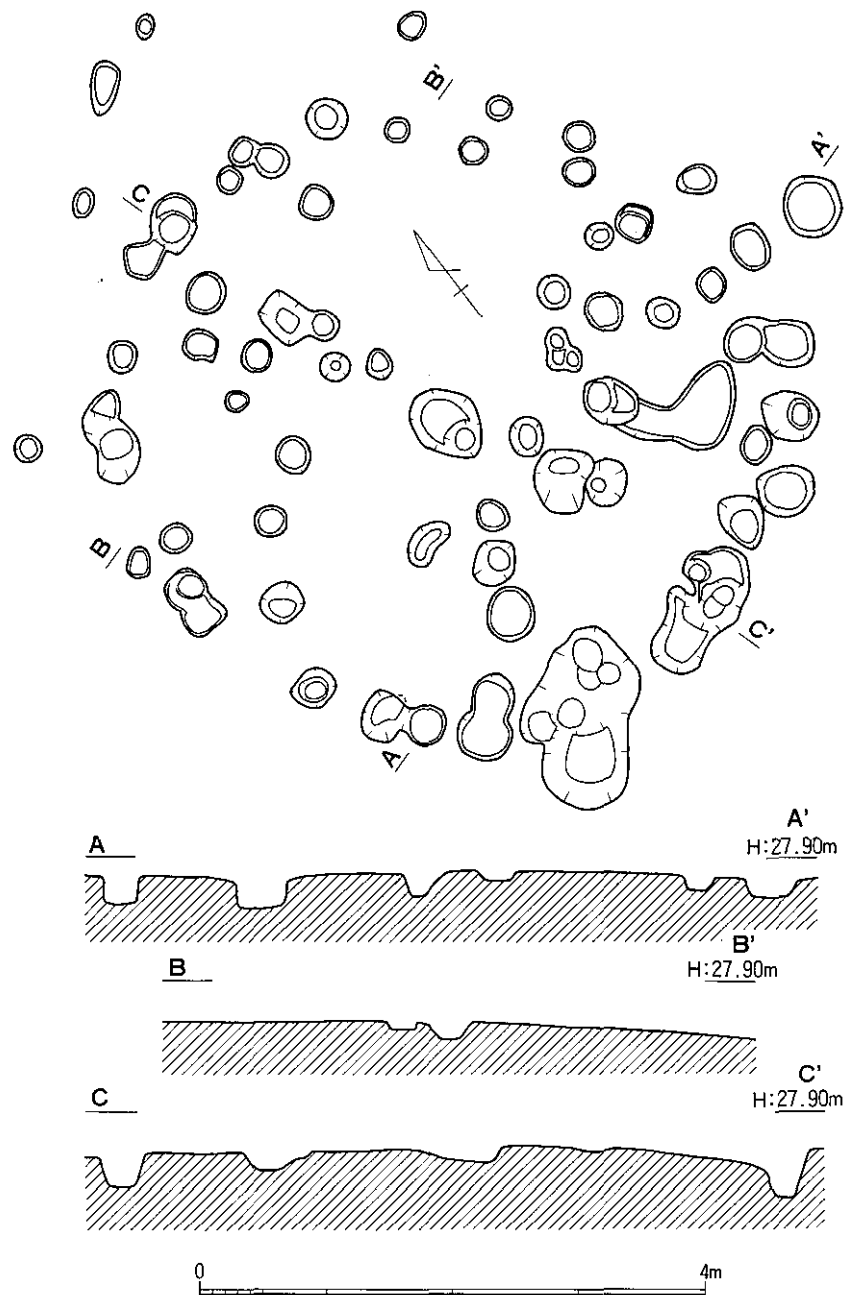
黒曜石の小剥片が少量出土しただけである。

SK 03 (図版13(2))

発掘区の南端に位置する。3号住居跡の北隣である。一部カク乱を受けているが、おおよそ楕円形を呈する。主軸長で 2.6×1.3 mを測る。底部は平坦ではなく、凹凸があり、中心部が最も深い。

出土遺物

須恵器の杯蓋の小片が出土している。天井部は回転ヘラケズリがていねいに施されている。



第36図. 22号住居跡実測図 (1/60)

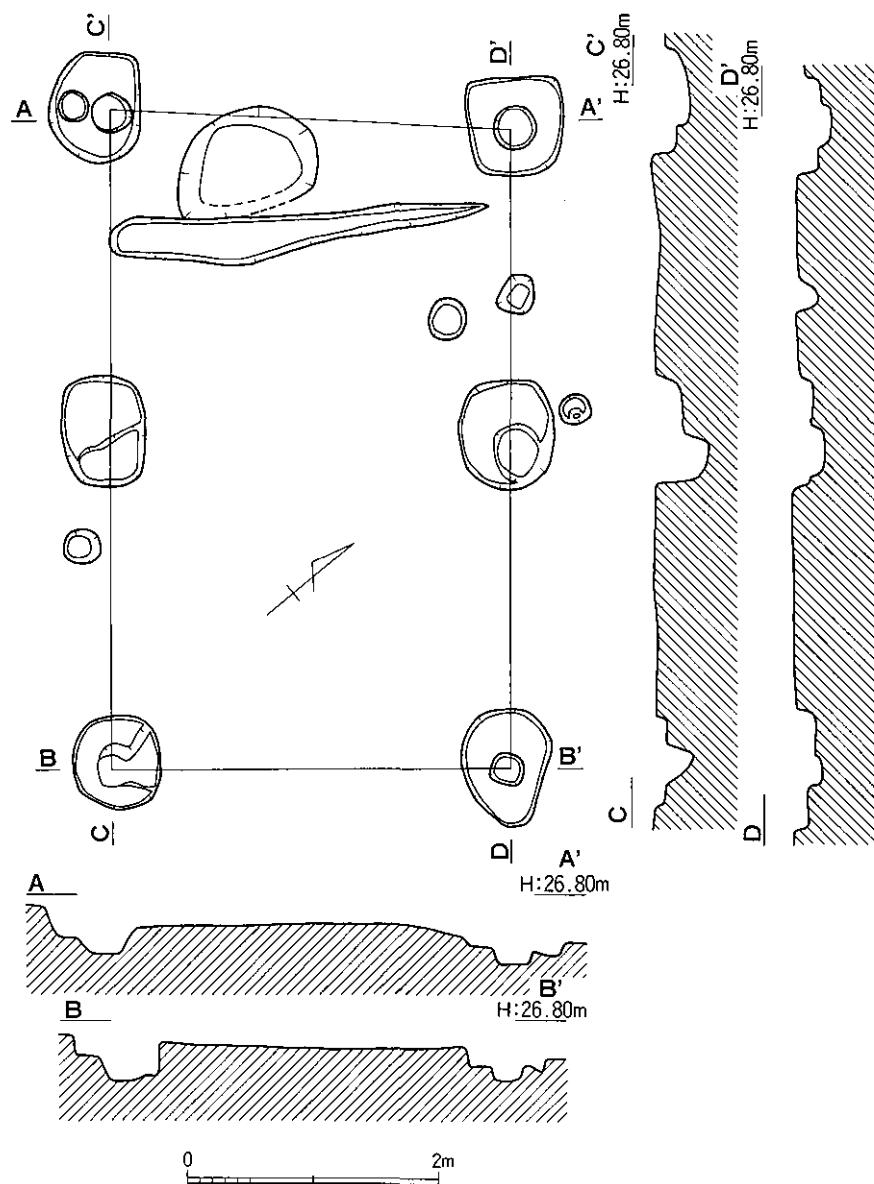
SK04 (第38図、図版14(1))

発掘区中央より西寄りにあり、4号住居跡と切り合う。当初直角に曲がることより、住居跡の周溝と考えたが、形は不整形ながらまとまるため土坑としたものである。幅約50～70cm、深さ約30cmである。弥生土器が壁面添いにまとまって出土した。

出土遺物 (第39・40図、図版18)

弥生土器が整理箱で約2分の1ほどと磨製石斧が1点、黒曜石剥片少量が出土した。

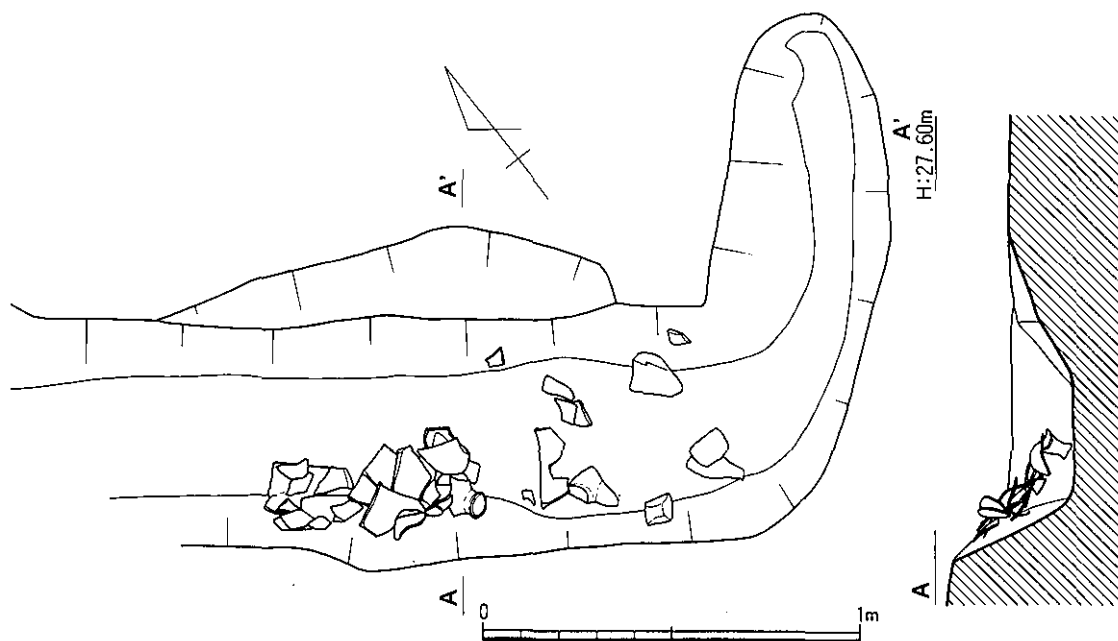
弥生土器 (34～40) 出土した弥生土器のほとんどが甕である。図示したのもすべて甕である。34は如意形口縁を持つものであるが、37～40は短く外反する口縁を持つものである。器面が荒れてい



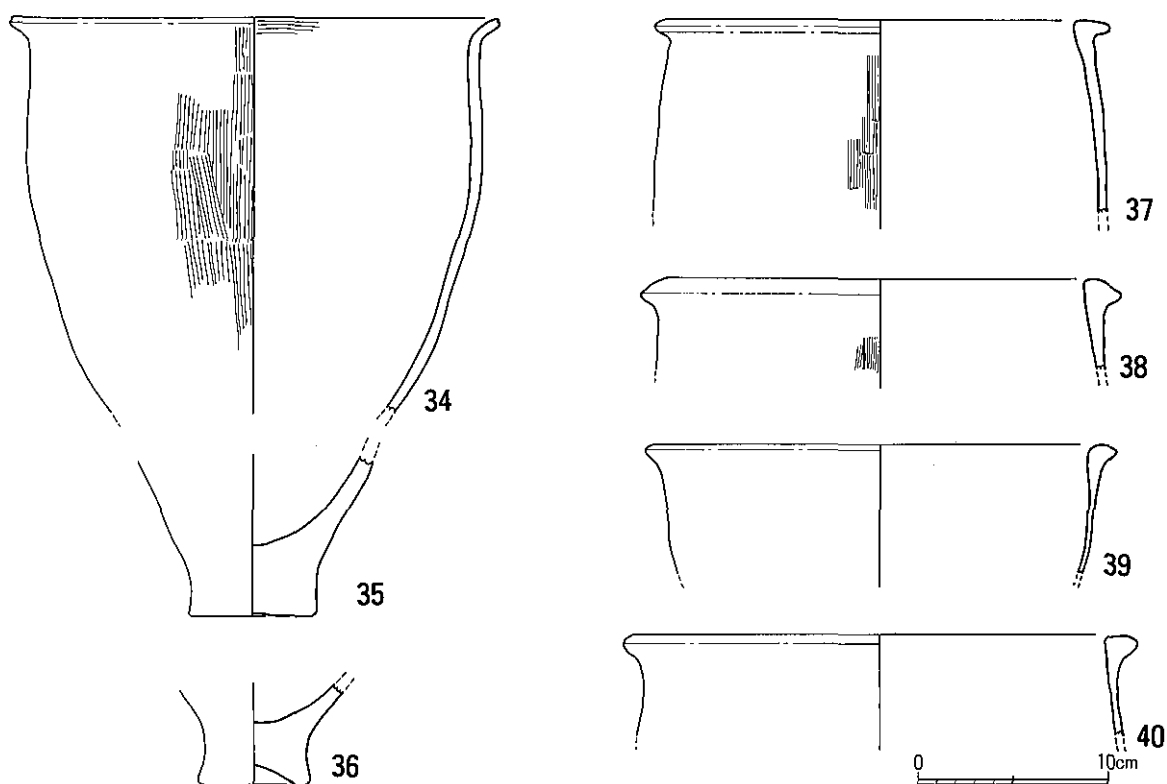
第37図、1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

て調整は見にくいですが、外面はハケメが残る。35・36は特徴的な底部で、36は上げ底である。

磨製石斧（第40図） 両端が欠損しているが、長さ11.8cm、幅7.8cmの大きさである。断面は楕円形を呈するもので、太型蛤刃石斧の破片であろう。



第38図. S K 04遺物出土状態実測図 (1/20)



第39図. S K 04出土土器実測図 (1/4)

S K 06 (図版14(2))

発掘区中央に位置する。22号住居跡の下位に当たる。ややゆがんだ円形状を呈する。主軸長で約1.15×1.10m、深さ約0.3mを測る。床面は比較的平坦である。

出土遺物 (第41図)

弥生土器少量と陶器1片が出土している。

弥生土器 (44) 全体の2分の1弱の破片であるが、小型の甕である。如意型に外反する口縁部をもつもので、口径15.7cm、器高13.8cmの大きさである。外面はハケ、内面はナデと思われる。

S K 15

発掘区西隅に位置する。19号住居跡の南約8mの位置になる。円形に近い。1.9×1.9m、深さ約0.15mである。床面は中央より北東側に寄った部分がやや深いが、おおむね平坦である。

出土遺物 (第41図)

弥生土器少量が出土している。

弥生土器 (41) 甕の口縁部の小破片である。復元口径約28cmを測るものである。器面の荒れのため、調整は不詳である。

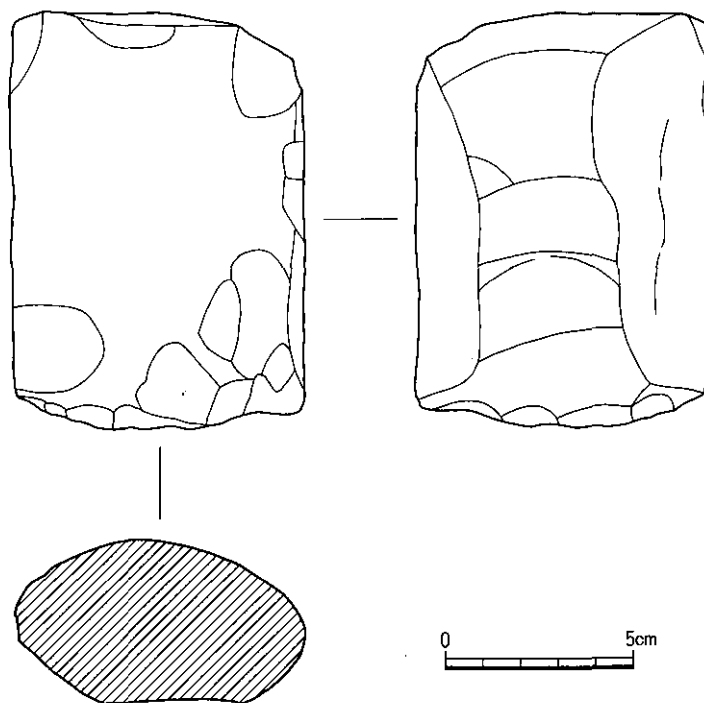
S K 19

S K 17の東南約9mに位置し、不整形を呈する。最も大きな部分で約1.6×1.05m、深さ約0.15mを測る。床面はそれほど平坦ではない。

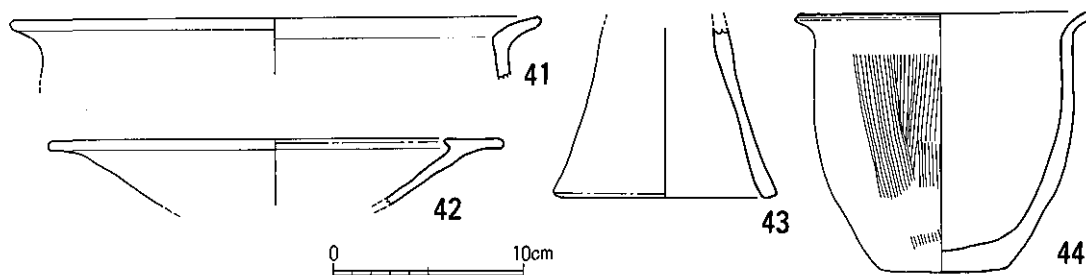
出土遺物 (第41図)

弥生土器少量が出土している。

弥生土器 (42・43) 小破片であるが、42は高杯と思われる。



第40図. S K 04出土石器実測図 (1/2)



第41図. 土坑出土土器実測図 (1/4)

風化が激しく、調整は不詳である。

(4). 甕 棺 墓

2基検出された。過去の発掘で検出された甕棺墓は今回の調査地の西側であったが、見つかった甕棺墓は発掘区の中でも東側の部分になり、既発見の甕棺墓とはだいぶ隔たった位置で検出されたことになる。2基とも小児棺で、しかも残りが悪い。

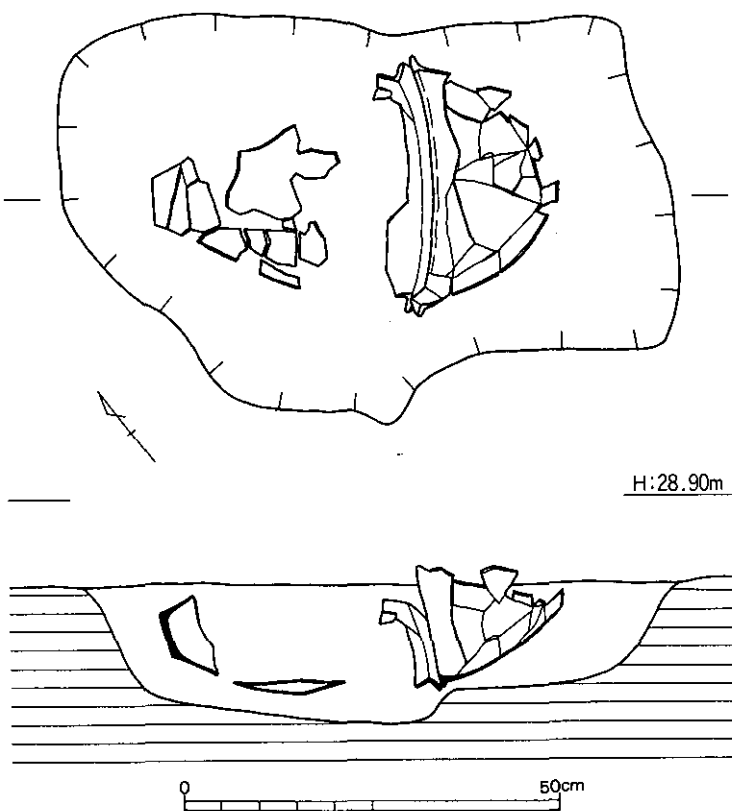
K01 (第42・43図、図版15(1))

発掘区の東側で丘陵の頂部に位置する。残りがはなはだ悪く、図版や挿図に示したとおりの検出状態であった。墓坑はやや不整気味の隅丸長方形を示す。主軸長で0.8×0.5mを測る。小型の甕2個の口縁部どうしを合わせた接口式の甕棺墓である。下甕は木の根のせいか底部と口縁部が残るのみである。上甕はそれに比べて残りがやや良い。主軸角度はN-50°-W、埋置角度は約+7°である。

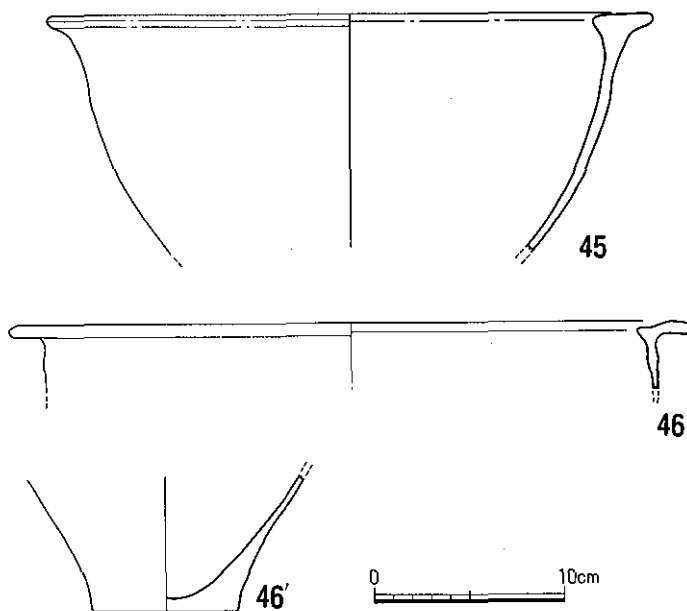
上甕は甕というより鉢型といった方が良いかもしれない器形である。平坦口縁を持つが、内面もやや突出している。復元口径約32cmの大きさである。内外面とも器壁が荒れていて調整は不詳である。下甕は残りが悪く、口縁部と底部を図示した。復元口径約36cm、底径7.8cmを測る。平坦口縁を持ち、内面もやや突出するものである。やはり器壁の荒れのため調整は不詳である。

K02 (第44図、図版15(2))

丘陵の頂部からやや下った場所に立地する。K01の南約9mの位置になる。



第42図. K01実測図 (1/10)



第43図. K01甕棺実測図 (1/4)

やはり、残りがはなはだ悪い。大きく削平されているため、詳細は不明だが、単棺だったかもしれない。検出された範囲では、墓坑は不整形で0.6×0.5m程の大きさである。甕は口縁部も失い、胴部の一部と底部が残るのみである。主軸角度はN-39°-E、埋置角度はおおむね+34°である。

出土した甕は状態が悪く図示できなかった。

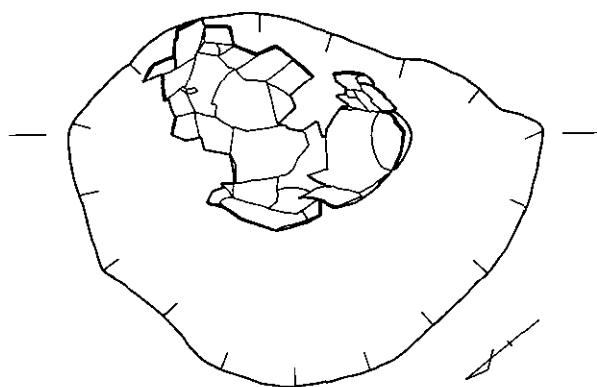
(5). 土 坑 墓

1基検出された。発掘区の西半部で検出されたものである。

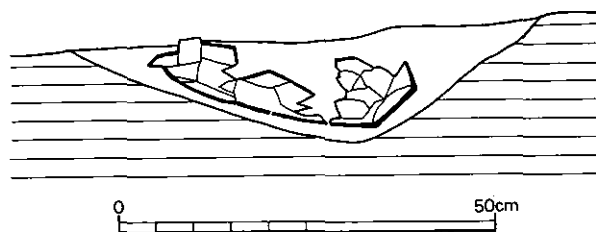
1号土坑墓（第45図、図版16）

丘陵の頂部、K01の北約7mの位置に当たる部分で検出された。ほぼ長方形を呈し、主軸長で1.95×0.65m、深さ約0.1mを測る。主軸角度はN-52°-Wである。

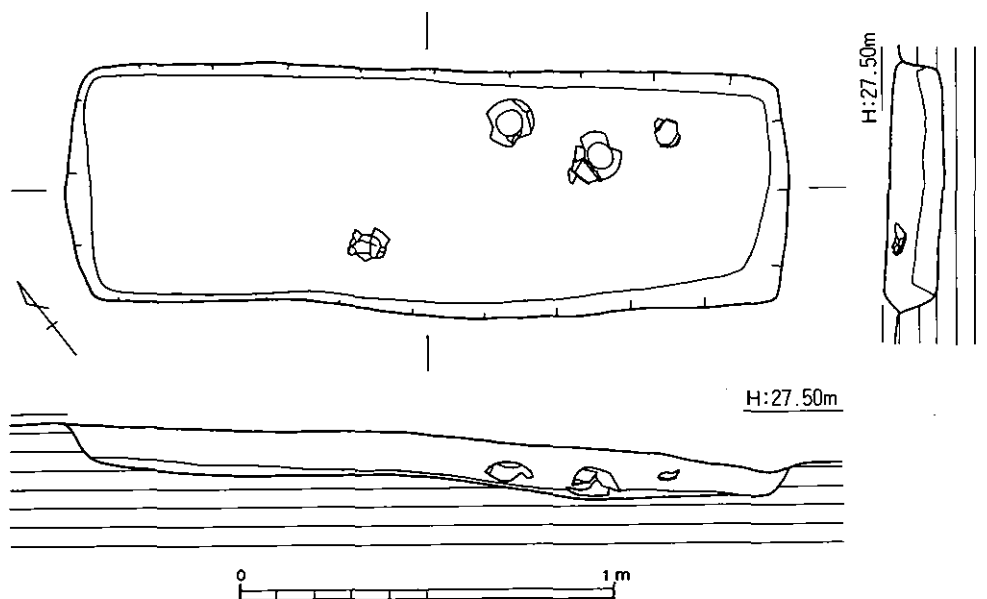
床面から若干浮いた状態で土師器の杯が5個出土した。これらの杯の間に遺体を置くとしたら斜めにでも置かなければならないということと、床面から浮いているということそして2個はかぶせるような状態で検出されていることなどから、木の蓋の上に置いていたものが、蓋の腐朽とともに棺の内部に落下したと見た方が良いであろう。



H:28.90m



第44図. K02実測図 (1/10)



第45図. 1号土坑墓実測図 (1/10)

出土遺物（第46図、図版19）

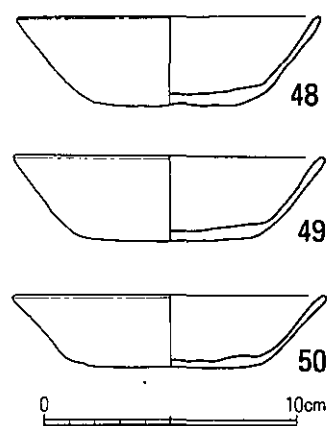
前述のように棺内から5個の土師器杯が出土した。2個は残り具合が悪く、図示できたのは3個である。

土師器

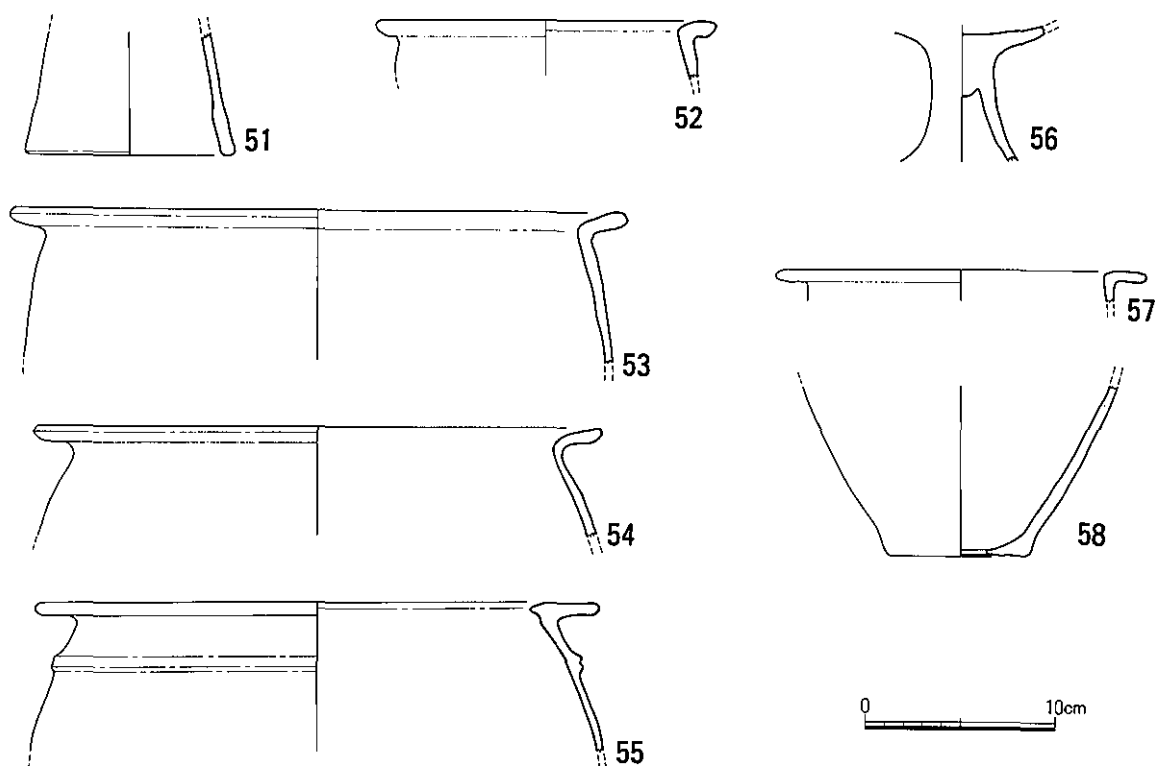
杯（48～50）おおよそ平坦な底部と斜めに直線的に開く体部を持つものである。すべてヘラ切りである。また、体部は器壁の荒れのため調整はよく見えないが、ヨコナデのようである。ミガキの痕跡は見えない。口径・器高は48が12.1と3.7cm、49が12.4と3cm、50が12.5と2.9cmである。

(6). 溝（第7図）

6条検出されたが、いずれも小規模の溝である。S D02～04は調査区の端にある。特に03・04は等高線に平行に走っており、あるいは集落の範囲を画するものかとも考えられるが、検出部分が短く断定はできないと思われる。S D01は4号住居跡の斜面上位に住居跡を巡るように走っており、排水溝と考えて良いのではないと思われる。S D05は弧状に延びる小規模な溝であるが、状況から竪穴住居跡の周溝とも考えられるものである。遺物はS D01から弥生土器の小破片と黒曜石の剥片がごく少量出土しただけである。



第46図. 1号土坑墓出土土器実測図（1/3）



第47図. ピット出土土器実測図（1/4）

(7). その他の遺構と遺物 (第47・48図、図版19)

いくつかのピットから遺物が出土しているので報告する。図示できた遺物が出土したのはP415、P565、P638、P867、P964、P976である。P415が発掘区西側にあるのに対して、その他はおおよそ東寄りになる。これらのピットが壁面の消失した住居跡になる可能性はないかということで検討してみたが、断定はできなかった。

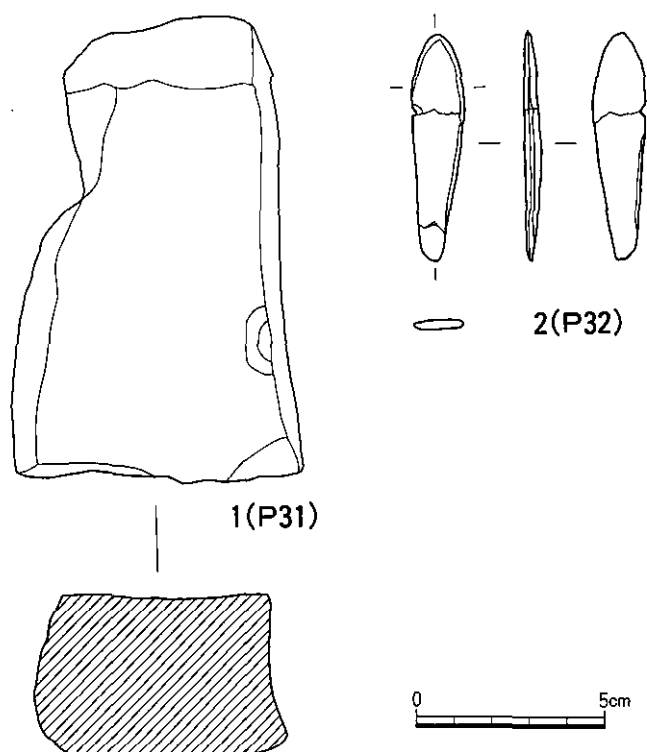
出土遺物 (第47図)

弥生土器 (51～58) 51はP415からの出土で、小破片であるが、器台であろう。52はP565からの出土で、小型の甕であろう。短く外反する口縁部を持つものである。56はP638から出土した高杯である。53はP867から出土した甕の口縁部破片である。口縁部が水平からやや立ち上がり始めた様相を示す。54はP964からの出土で53と似た形態の甕である。57・58もP964からの出土で、どちらも甕であろう。55はP976からの出土で、凸帯を持つ甕の上半部である。風化が激しいが、やや薄手に作られている。以上のすべての土器は風化が激しく、調整は不詳である。

石器 (第48図)

砥石 (1) P31からの出土である。10.4×7.7cmの大ききで、広面1面と狭面1面が良く使われている。

磨製石鏃 (2) P32からの出土である。やや淡褐色が混ざるが、白色系の材質で作られている。6.0×1.4cm、重さ3.0gを測る。



第48図. ピット出土石器実測図 (1/2)

V. まとめ

中・寺尾遺跡については、今回の発掘調査で全て調査が完了したことになる。また報告も完了することになる。ここでは、まず今回の発掘調査で検出した遺構の時期を中心に簡単にまとめてみたい。次に遺跡全体についての問題点をまとめてみたい。

1. 遺構の時期

住居跡

円形と長方形・方形のものがある。主に出土遺物から推定したが、遺物のないものもあり、すべての住居跡について明らかになったわけではない。

- 1号住居跡－出土土器から弥生時代中期後半と推定できる。
- 2号住居跡－出土土器から弥生時代中期後半頃と思われる。
- 3号住居跡－出土土器から弥生時代中期前半と推定できる。
- 4号住居跡－出土土器は小片ながら弥生時代中期前半と推定できる。
- 5号住居跡－弥生土器が少量出土したが、小片のため時期を推定できなかった。
- 6号住居跡－出土土器がなく時期不明である。
- 7号住居跡－出土土器から古墳時代中期、5世紀前半頃のものと考えられる。
- 8号住居跡－弥生土器と土師器と思われる破片が少量出土したが、小片のため時期を推定できなかった。
- 9号住居跡－出土土器から弥生時代後期と思われる。
- 10号住居跡－出土土器がなく時期不明である。
- 11号住居跡－出土土器がなく時期不明である。
- 12号住居跡－出土土器がなく時期不明である。
- 13号住居跡－出土土器から弥生時代中期後半と推定できる。
- 15号住居跡－弥生土器が出土したが、風化が激しく、また小片のため時期を推定できなかった。
- 16号住居跡－出土土器がなく時期不明である。
- 17号住居跡－弥生土器が少量出土した。小片のため図示できなかったが、中期後半頃と思われる。
- 18号住居跡－出土土器から弥生時代中期後半頃と推定できる。
- 19号住居跡－出土土器から弥生時代中期前半～中頃にかけてのものと考えられる。
- 20号住居跡－弥生土器が少量出土したが風化が激しく、また小片のため時期を推定できなかった。
- 21号住居跡－ピットから土器の小片が少量出土しているが、時期の推定はできなかった。
- 22号住居跡－これもピットから土器の小片が少量出土しているが、時期の推定はできなかった。
- 23号住居跡－前二者と同様の遺物出土状況で、時期の推定はできなかった。

掘立柱建物跡

ピットから弥生土器・黒曜石・サヌカイト剥片が少量出土しているが、時期の決定までは至らなかった。

土坑

時期の推定ができたのは以下の5基である。

S K03―須恵器が出土している。杯蓋の破片であるが、天井部と体部の境に明瞭な段を持つものである。段の部分を残すが、体部のほとんどは失われており、明確にはし難いが、5世紀後半から6世紀初頭頃のものと思われる。

S K04―甕は城ノ越式の甕である。従って、弥生時代中期の初頭頃のものと思われる。

S K06―弥生時代中期の前半頃と思われる。

S K15―「く」の字形の口縁部を持つことから後期のものと思われる。

S K19―高杯の口縁部の形態から弥生時代中期の後半頃のものと思われる。

甕棺墓

K01―口縁部の形態から弥生時代中期の中頃のものと思われる。

K02―口縁部・底部など特徴を示す部分が失われており、時期の判定はできなかった。

土坑墓

土師器の杯が出土している。深さがややある点、体部と底部の境がやや丸みを持つ点などから考えて、太宰府市で使用されている山本信夫氏の編年^{〔註1〕}でいうⅦ期、大宰府史跡の遺構S K1800の時期^{〔註2〕}に当たるのではなかろうかと考える。実年代では9世紀の中頃から後半頃と推定されている。

その他

溝やピットから土器が少量ずつ出土しているが、おおよそ時期がわかりそうな破片は弥生時代中期と中期から後期にかけてのものが多い。

2. 中・寺尾遺跡の問題点

中・寺尾遺跡は今回の発掘調査ですべてが完了したことになる。検出された主な遺構は弥生時代の墓では土坑墓87基、甕棺墓59基、箱式石棺墓1基、石蓋土坑墓2基を数える。住居跡は弥生時代と古墳時代のものがあるが、38軒、また、平安時代の土坑墓1基となる。その他貯蔵穴、不整形ピット、土坑、竪穴状遺構などがある。基本的には弥生時代の遺構がほとんどを占める。

さて、中・寺尾遺跡周辺には弥生時代の遺跡が多い。第2図に示すとおり、中・寺尾遺跡の立地する低丘陵の先端部にはヒケシマ遺跡、東側の谷をはさんでは森園遺跡（中・西コモリ遺跡）、さらにその東にやや離れて松葉園遺跡、また南側400mには銀山遺跡、北西500mには御陵前ノ椽遺跡があるが、すべて弥生時代の遺構が多い遺跡である。ヒケシマ遺跡は2回の発掘調査を実施しているが、弥生時代中期初頭の土坑、中期中葉の甕棺墓^{〔註3〕}その他が検出されている。森園遺跡は8回の調査^{〔註4〕}を実施し、その一部は報告しているが、弥生時代中期の住居跡、甕棺墓地、祭祀用と思われる土器多数を廃棄した溝などが検出されている。松葉園遺跡は2回の調査を実施しており、古墳時代と

思われる小石室の他、弥生時代中期の住居跡や祭祀土坑が検出されている。銀山遺跡は宅地開発によって未調査のまま壊滅した遺跡であるが、弥生時代前期の土器などが多く見つかったとのことである。御陵前ノ椽遺跡は報告書を刊行しているが、弥生時代前期の甕棺墓地であった。副葬小壺が^{〔註5〕}見られた。^{〔註6〕}

このように見てきてまず時期ごとの遺構について気が付くのは、以下のことである。

- ①. 弥生時代前期については、墓地はあるが、住居跡は見つからないこと。
- ②. 中期については両者が見つかっていてその数も他の時代に比べて格段に多いこと。
- ③. 後期についてはほとんど見つかっていないこと。

森園遺跡は中・寺尾遺跡と谷をはさんで相対し、中・寺尾遺跡と同じく、丘陵先端部に墓地（甕棺中心）を持ち、背後の丘陵中心部に集落を持つ。ただ、森園遺跡には前期の墓地がない。甕棺は中期前半から中期後半が主体となる。墓地は中・寺尾遺跡から森園遺跡へ移るようにも見える。しかし、住居跡は両者とも中期のものが多くあり、墓地の様相とは一致しない。両遺跡と中・寺尾遺跡の先にあるヒケシマ遺跡との関係を検討していかなければならない。

また、遺物の点では青銅器などの注目されるものはほとんどない。やや注目されるものとしては次のものが上げられる。

- ①. 中・寺尾遺跡では磨製石鏃3。
- ②. 森園遺跡では銅矛のものとされる鋳型片1。

中期中頃以降細型銅剣・中国製青銅鏡等を甕棺に副葬し奴国の王墓と言われる須玖岡本遺跡や、後期を中心に青銅器製造関連の遺物を多数出土する須玖遺跡群から数キロしか離れていないが、出土遺物に格段の差があることは、中・寺尾遺跡など周辺の遺跡の様相である。これがいわゆる一般集落の様相であろう。

以上であるが、吉野ヶ里遺跡のように広大な範囲の遺跡発掘調査成果は遺跡の範囲の捉え方や、居住部分と墓地部分の関係等に多くの問題点を提示したと思う。これらの成果を見ながら、遺跡の範囲をどう捉えるか、特に森園遺跡・ヒケシマ遺跡との関係で、集落と集落、集落と墓地の関係等を考慮して、今後とも遺跡間・遺構間の関係を追求し、集落構造の解明ひいては弥生社会の構造の解明を目指さなければならぬと考える。

〔註1〕 山本信夫「統計上の土器」『九州上代文化論集』（乙益重隆先生古希記念論文集）1990

〔註2〕 『大宰府史跡一昭和56年度概報一』九州歴史資料館 1982

〔註3〕 1次調査については『牛頸地区遺跡群Ⅰ』大野城市教育委員会 1985の付編に概報を掲載している。

〔註4〕 『森園遺跡』大野城市教育委員会 1988

〔註5〕 福岡県教育庁文化財保護課岩瀬正信氏による。

〔註6〕 『御陵前ノ椽遺跡』大野城市教育委員会 1997

版 图



(1) 発掘調査前全景（南から）



(2) 発掘調査前（北西から）



(1) 調査地南東側（北西から）



(2) 調査地南東側（北から）



(1) 1・2号住居跡



(2) 3号住居跡

图版 4



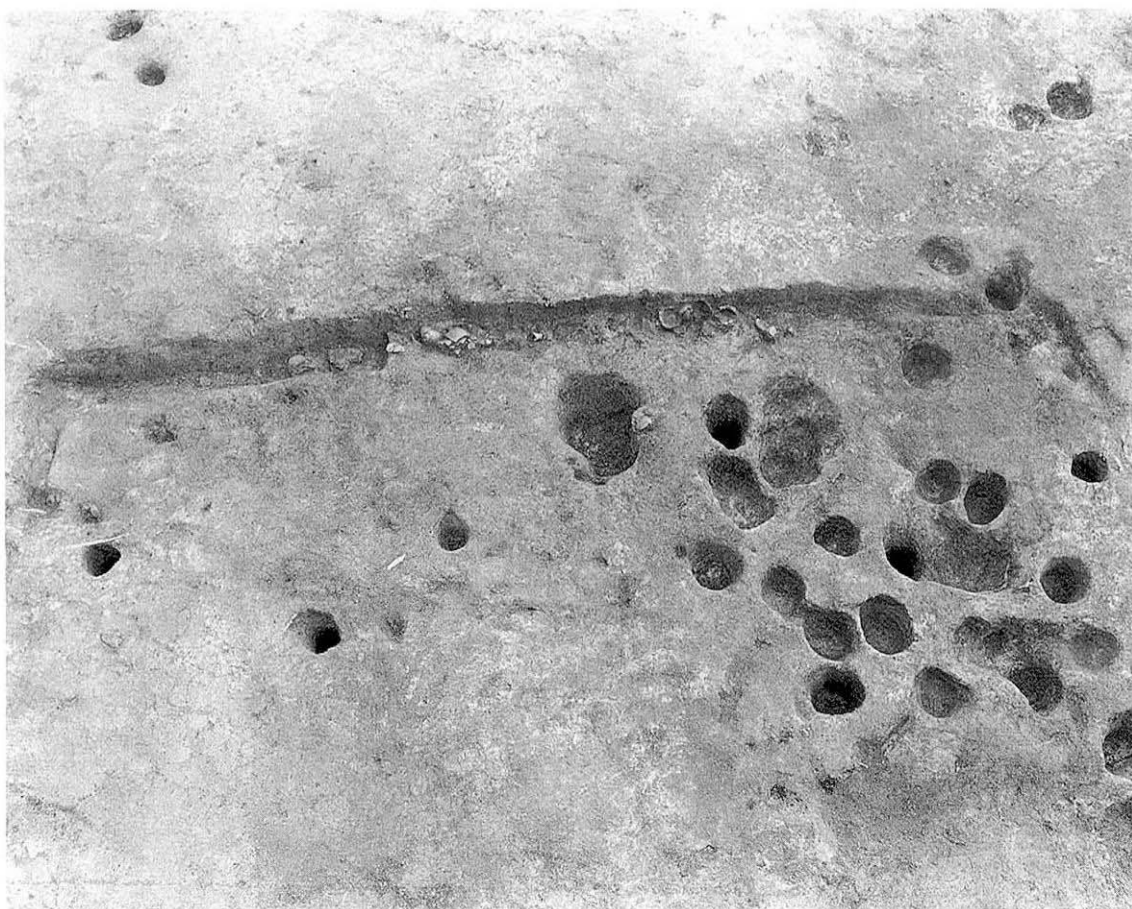
(1) 4 • 5 号住居跡



(2) 5 号住居跡



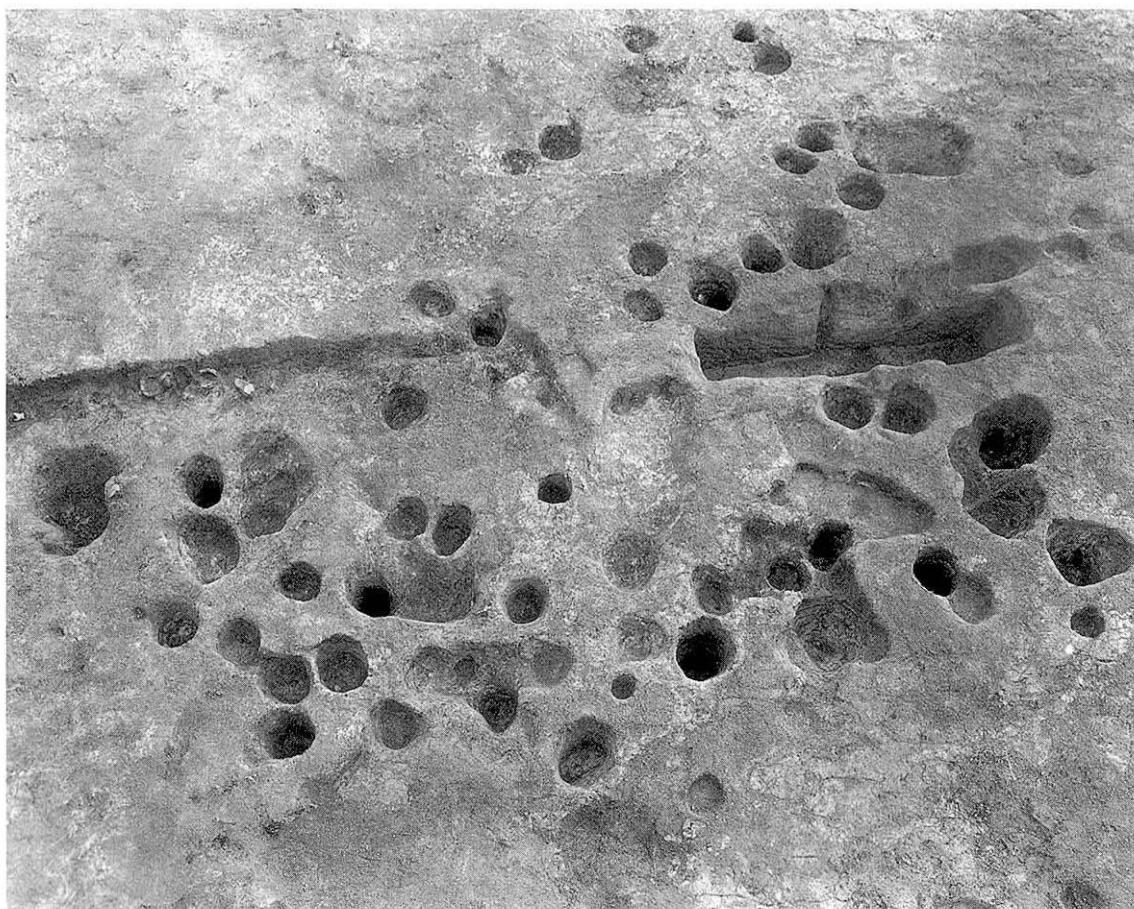
(1) 6号住居跡



(2) 7号住居跡



(1) 7号住居跡周溝



(2) 7号住居跡周辺



(1) 8号住居跡



(2) 9号住居跡



(1) 10・11号住居跡



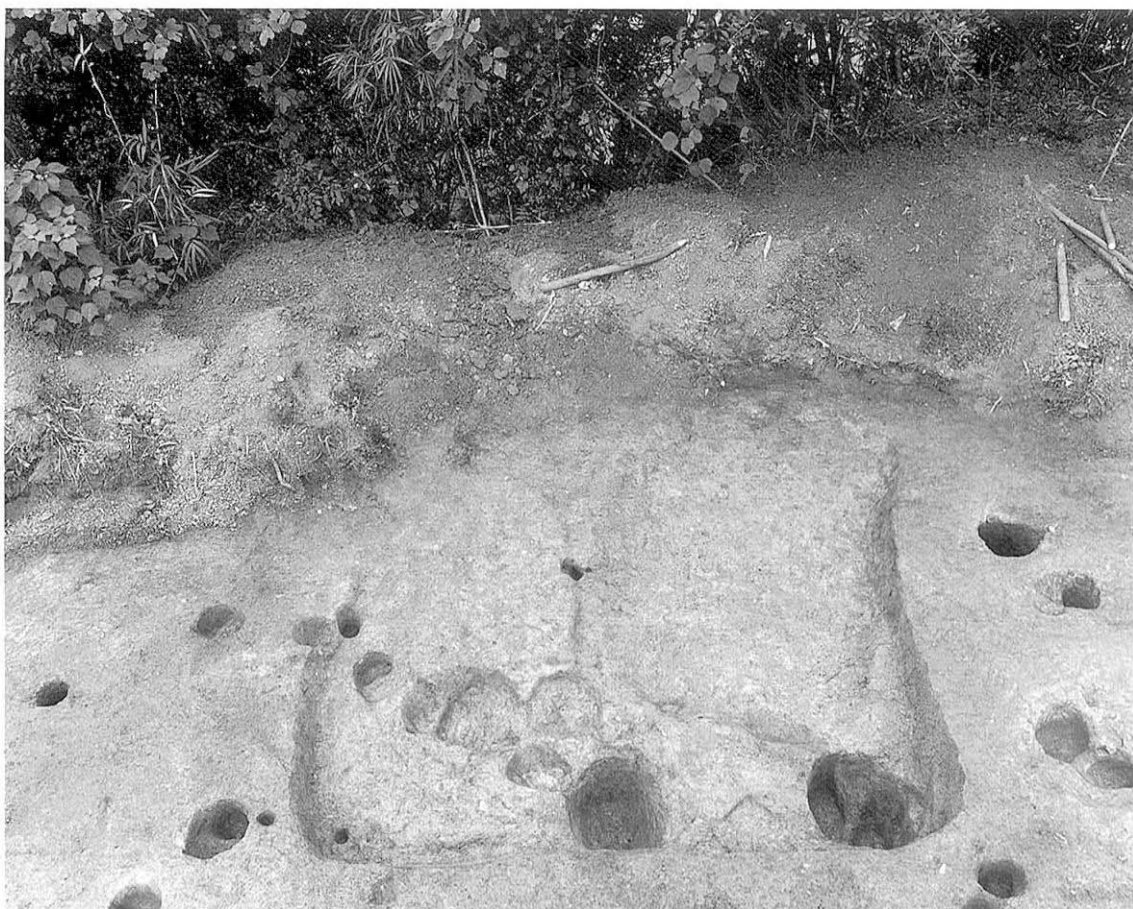
(2) 12号住居跡



(1) 13・15号住居跡



(2) 13号住居跡



(1) 15号住居跡



(2) 16号住居跡



(1) 17号住居跡



(2) 18号住居跡



(1) 19・20号住居跡



(2) 22号住居跡



(1) 1号掘立柱建物跡



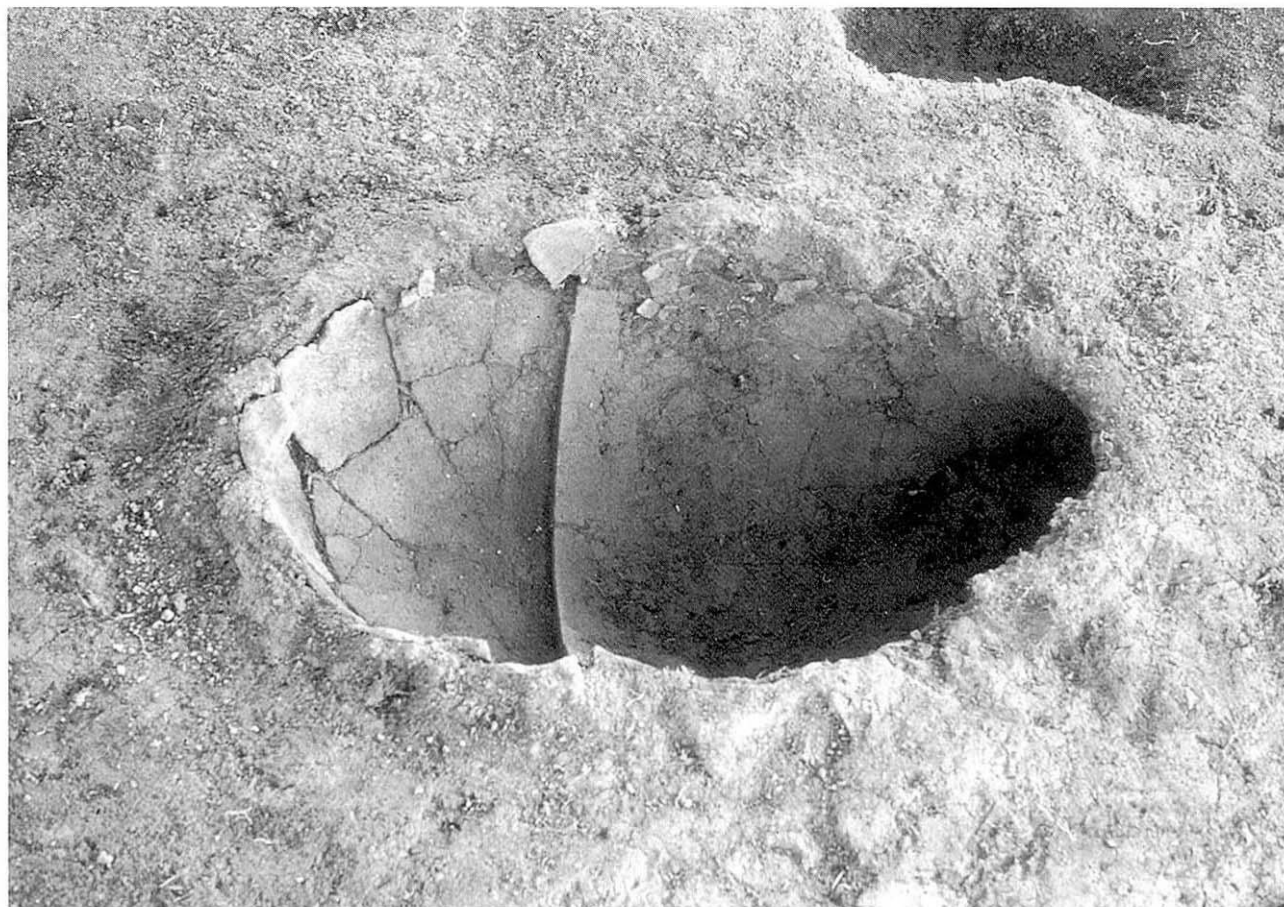
(2) S K 03



(1) S K 04



(2) S K 06



(1) K01



(2) K02



(1) 1号土坑墓



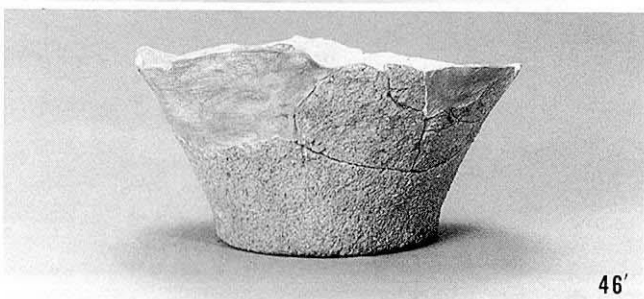
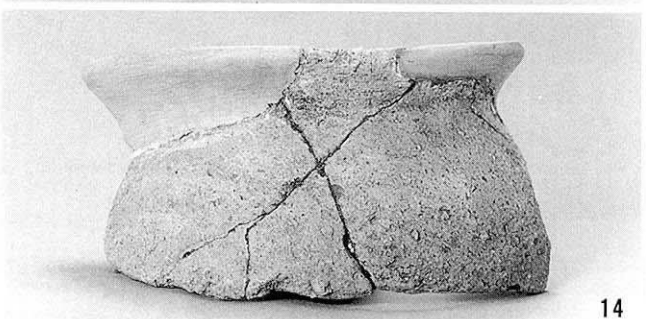
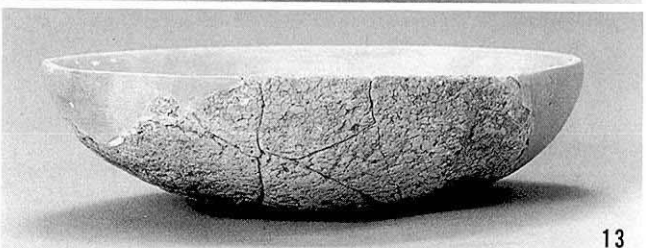
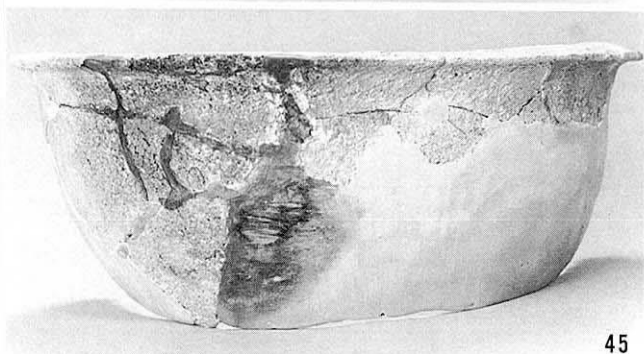
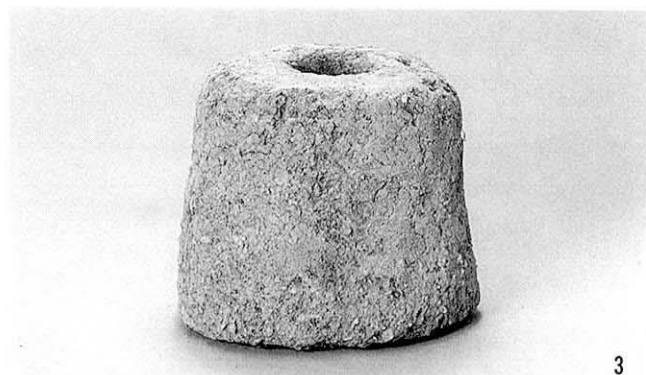
(2) 1号土坑墓遺物出土狀態



(1) P 964

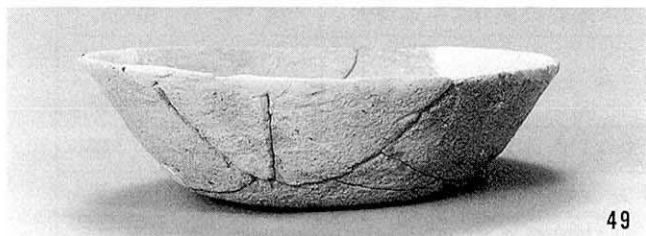


(2) 中・寺尾遺跡現況

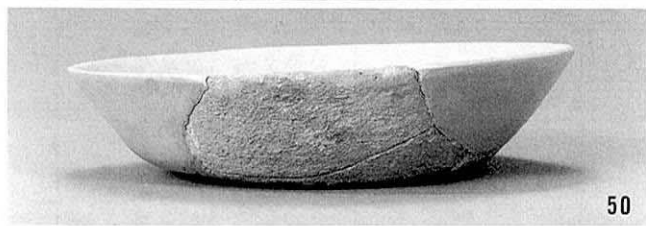




48



49



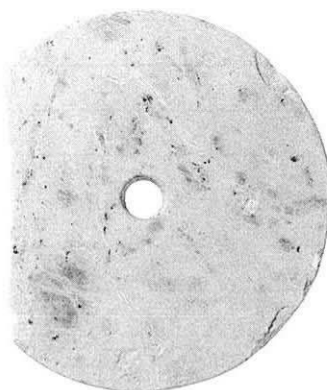
50



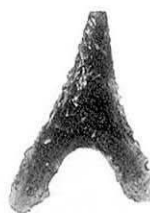
55



58



1号住



2号住



ピット

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なか・てらおいせき							
書 名	中・寺尾遺跡Ⅲ							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第54集							
編 著 者 名	舟山 良一							
編 集 機 関	大野城市教育委員会							
所 在 地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 TEL092-501-2211							
発 行 年 月 日	西暦 1999年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なか・てらおいせき 中・寺尾遺跡	福岡県 大野城市 大池			33°32'22"	130° 29'22"	1983. 6 .29 1983.10.24	約3,000㎡	公園整備
所収遺跡名	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中・寺尾遺跡	集落 墓地	弥生 古墳 平安		住居跡 土坑 溝 甕棺墓 土坑墓		弥生土器・須恵器 土師器・陶磁器 石器		弥生時代中期の 住居跡が主体

大野城市文化財調査報告書

第 54 集

平成11年 3 月31日

発 行 大 野 城 市 教 育 委 員 会
福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 - 1

印 刷 株式会社 チューエツ福岡工場
福岡県博多区東比恵 2 - 9 - 1